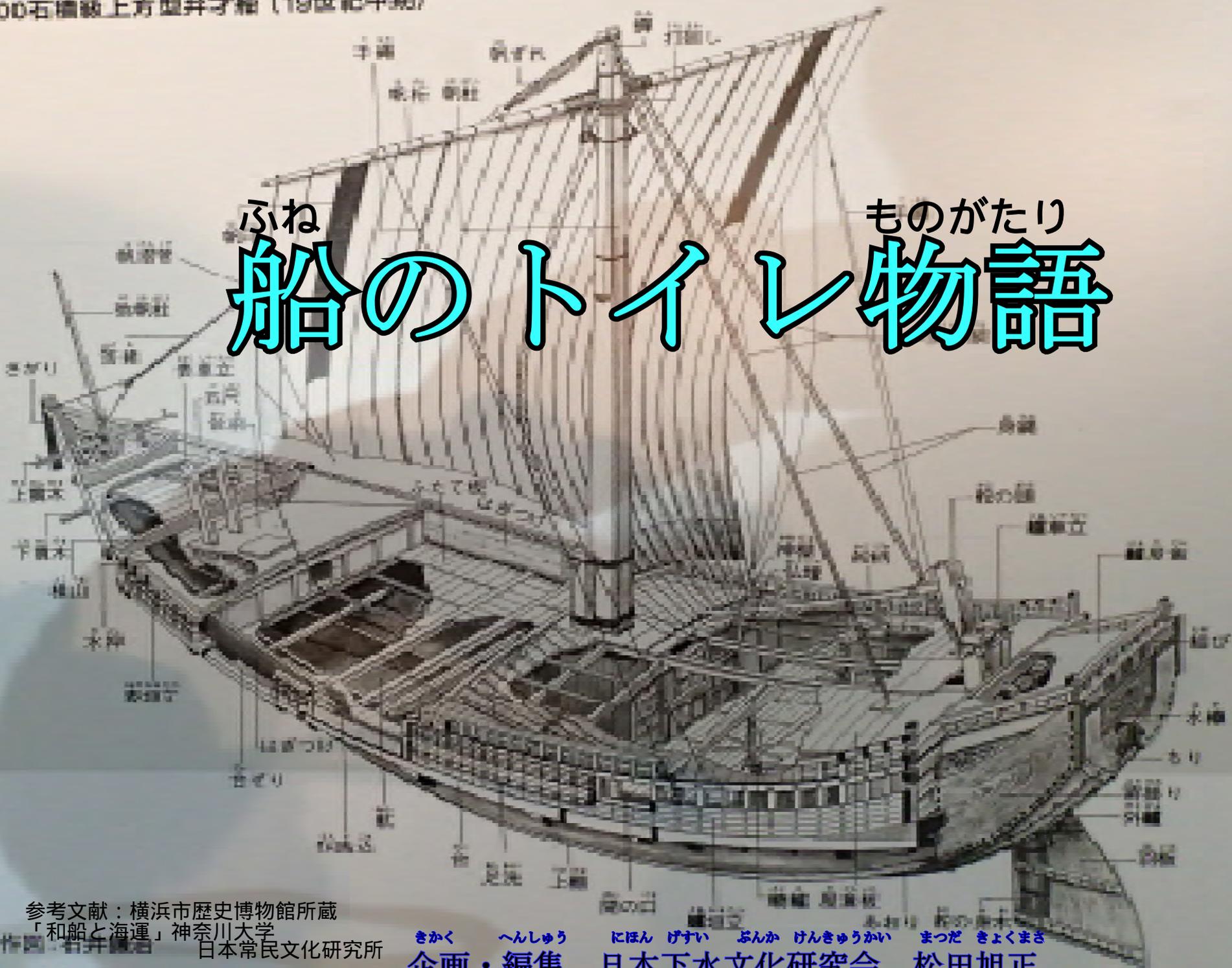


1,000石級上方型并才船（19世紀中期）



ふね 船のトイレ物語 ものがたり

参考文献：横浜市歴史博物館所蔵
「和船と海運」神奈川大学
梅岡・石井編著 日本常民文化研究所

きかく へんしゅう
企画・編集

にほん げすい ぶんか けんきゅうかい
日本下水文化研究会

まつだ きよくまさ
松田旭正

もく じ
目 次
ふね ものがたり
船のトイレ物語

(1) タイトル 船のトイレ物語	P1	(19) 淀川の三十石船	P19	(37) 海御座船のトイレ事情 (2)	P37
(2) 「目次」船のトイレ物語	P2	(20) [東海道中膝栗毛]船中のトイレ (1)	P20	(38) 高松藩飛龍丸詳細図 (1)	P38
(3) はじめに	P3	(21) [東海道中膝栗毛]船中のトイレ (2)	P21	(39) 高松藩飛龍丸詳細図 (2)	P39
(4) 昭和初め頃の船のトイレ事情	P4	(22) 両国川開きに便所船登場	P22	(40) 高松藩飛龍丸詳細図 (3)	P40
(5) 玉川上水に船が通る	P5	(23) 金毘羅船のトイレ事情	P23	(41) 高松藩飛龍丸詳細図 (4)	P41
(6) 玉川上水通船と富士川船運の関係	P6	(24) 家船と小型漁船のトイレ (1)	P24	(42) 高松藩飛龍丸詳細図 (5)	P42
(7) 玉川上水通船と船の運航	P7	(25) 家船と小形漁船のトイレ (2)	P25	(43) 高松藩飛龍丸詳細図 (6)	P43
(8) 玉川上水、船の乗客と運賃	P8	(26) 家船と小型漁船のトイレ (3)	P26		
(9) 玉川上水、船のトイレ事情	P9	(27) 家船と小型漁船のトイレ (4)	P27		
(10) 玉川上水通船願書の約束事	P10	(28) 昭和の家船のトイレ位置	P28		
(11) 新河岸川の船運と川舟のトイレ (1)	P11	(29) 長崎県家船の生活様式	P29		
(12) 新河岸川の船運と川舟のトイレ (2)	P12	(30) 家船生活の豊島漁民	P30		
(13) 新河岸川の船運と川舟のトイレ (3)	P13	(31) 沖家室島の家船の便所事情	P31		
(14) 新河岸川の船運と川舟のトイレ (4)	P14	(32) 弁財船「千石船」の便所	P32		
(15) 利根川と江戸川の船運	P15	(33) 弁財船「浪華丸」復元帆走試験	P33		
(16) 利根川高瀬船の生活 (1)	P16	(34) 熊本藩の御座船「泰宝丸」	P34		
(17) 利根川高瀬船の生活 (2)	P17	(35) 川御座船のトイレ事情	P35		
(18) 利根川高瀬川の生活 (3)	P18	(36) 海御座船のトイレ事情 (1)	P36		

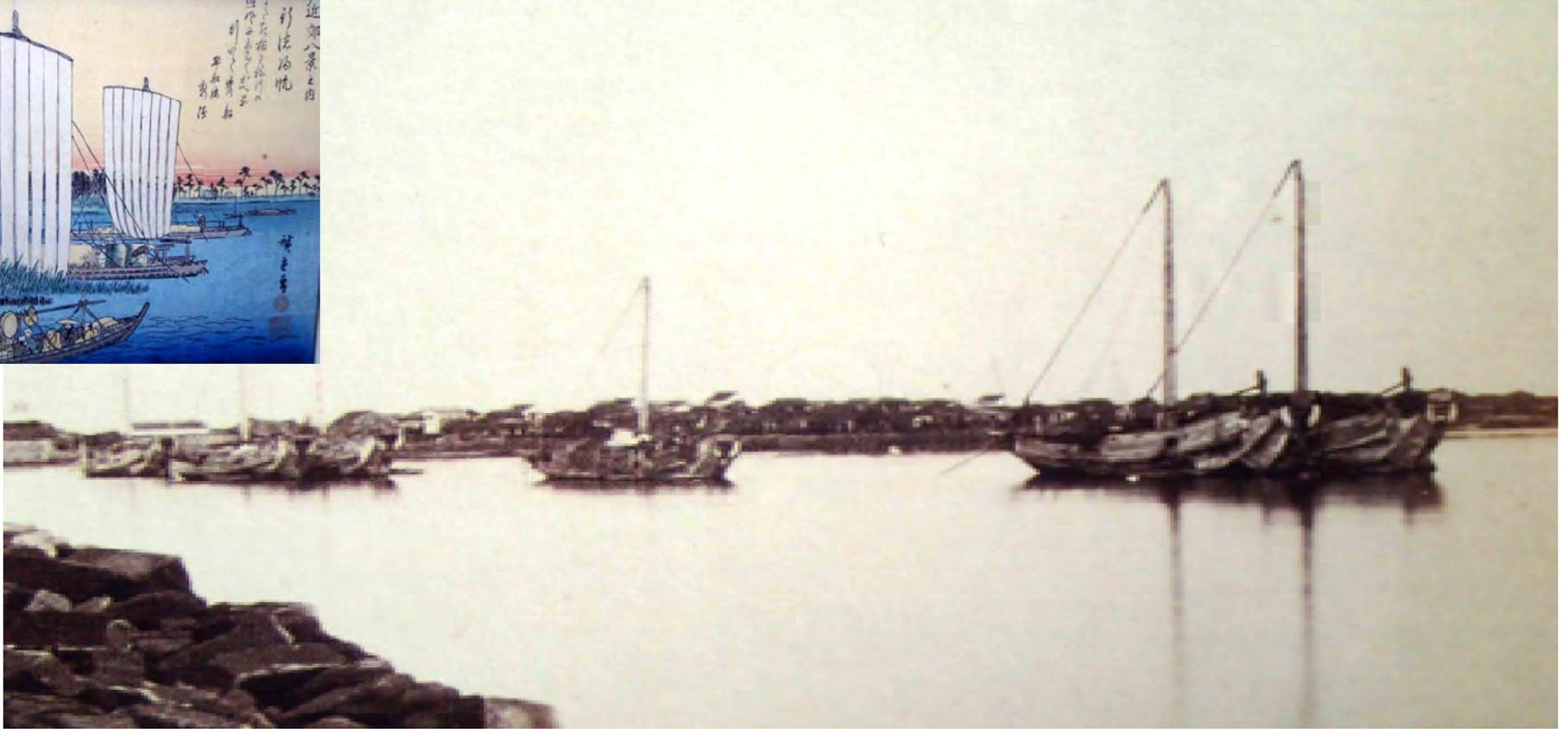
(3) はじめに

「^{ふね}船の^{ものがたり}トイレ物語」につきまして^{くたいてき}具体的に^{もう}申しますと、^{ひろ}広い^{いみ}意味での^{にんげん}人間を^{ふく}含む^{どうぶつ}動物
^{せいめいいじ}は^{えいようぶつ}生命維持のために^{たいない}栄養物を^と体内に取り入れ、^い不必要な物を^{ふひつよう}排泄物として^{もの}体外に放
^{しゅつ}出しています。^{じんるい}人類も^{ほか}他の^{どうぶつ}動物と同じ^{おな}ことが^{せいかつげんしょう}生活現象（^{せいり}生理）として、^{たいないとけい}体内時計の
ようになっています。^{じんるい}人類の^{きげん}起源から^{げんざい}現在まで^{はいせつ}排泄する^{こうい}行為は^{かわ}変わりません。
ただ^{なに}何が^か変わったのかと^い云いますと、^{ひとびと}人々の^{しょう}屎尿の^{はいせつ}排泄する^{ばしょ}「場所」と^{しせい}「姿勢」が
^か変わりました。^{ばしょ}場所については、^{おお}大きく^わ分けて（^{そら}空）（^{りく}陸）（^{うみ}海）に分けられます
が、^{そら}空と^{うみ}海は^{ひと}人（^{にんげん}人間）だけでは^{ばしょ}その場所に^{とど}留まることは^{でき}出来ませんので、^{どうぐ}道具（
^{ひこうき}飛行機）（^{ふね}船）を^{しょう}使用します。また^{りくじょう}陸上においては^{いどう}移動手段に^{しゅだん}道具を^{どうぐ}使いますが、
^{ちじょう}地上を^{はな}離れない所に^{ところ}固定できる^{こてい}ところが（^{そら}空）や（^{うみ}海）とでは^{こと}異なります。

^{すいじょう}水上での^{いどう}移動手段の^{しゅだん}場所（^{ふね}船）の^{べんじょ}便所について^{いろいろ}色々な^{ふね}船について、^{しりょう}資料を^{あつめ}集めました。



(4) 昭和の初め頃の船のトイレ事情



たいしょうまつき しょうわ しょき とうきょう すみだがわ かこう にぶね おお すみだがわ のぼ くだ
大正末期から昭和初期ごろの東京の隅田川河口では 荷船が多く、隅田川を上り、下り
していました。船には夫婦で乗船し共稼ぎで、小さい子どもたちも同居していました。

ふね せいじ せいかつ な だんせい かわ ちょくせつ じょせい
これらの船では「世事」*1で生活していましたが、トイレは無く、男性は川へ直接、女性
は夕暮れまで待つか、我慢できないときは船ばたに、しゃがみ込んで用を足していたそう
です。

* 1 世事：乗船者の生活の場

参考文献 和船探求覚之書

和船と海運

「隅田川河口弁財船 横浜開港資料館蔵」

国立国会図書館 蔵
[江戸近郊 八景行徳帰帆]

たま がわ じょうすい ふね とお
(5) 玉川上水に船が通る

めいじ ねん たまがわじょうすい さがみ ぶしゅう に しゅうず しめ ちず
 明治12年(1912)玉川上水が「相模・武州二州図」に示された地図です。

たまがわじょうすいぐち
 玉川上水口



げんさい こたいらぶきん
 現在の小平付近



よつや おおきと
 四谷大木戸



めいじ ねん がつ にち たまがわじょうすい ひと ぶっし はこ つうせん じつげん つうせん はむら
 明治三年(1870)四月十五日、玉川上水に人や物資を運ぶ通船が実現しました。通船は羽村
 よつや おおきと やく り やく けいざいこうか にしたま ちいき とうきょう
 から四谷大木戸まで約十一里(約四十三キロメートル)でした。経済効果は西多摩地域と東京の
 ぶっし じんば せんうん たまちいき かつきてき できごと
 物資が、人馬から船運になるので、多摩地域では、画期的な出来事となりました。

たまがわじょうすい つうせん ふじがわ せんうん かんけい
 (6) 玉川上水通船と富士川船運の関係

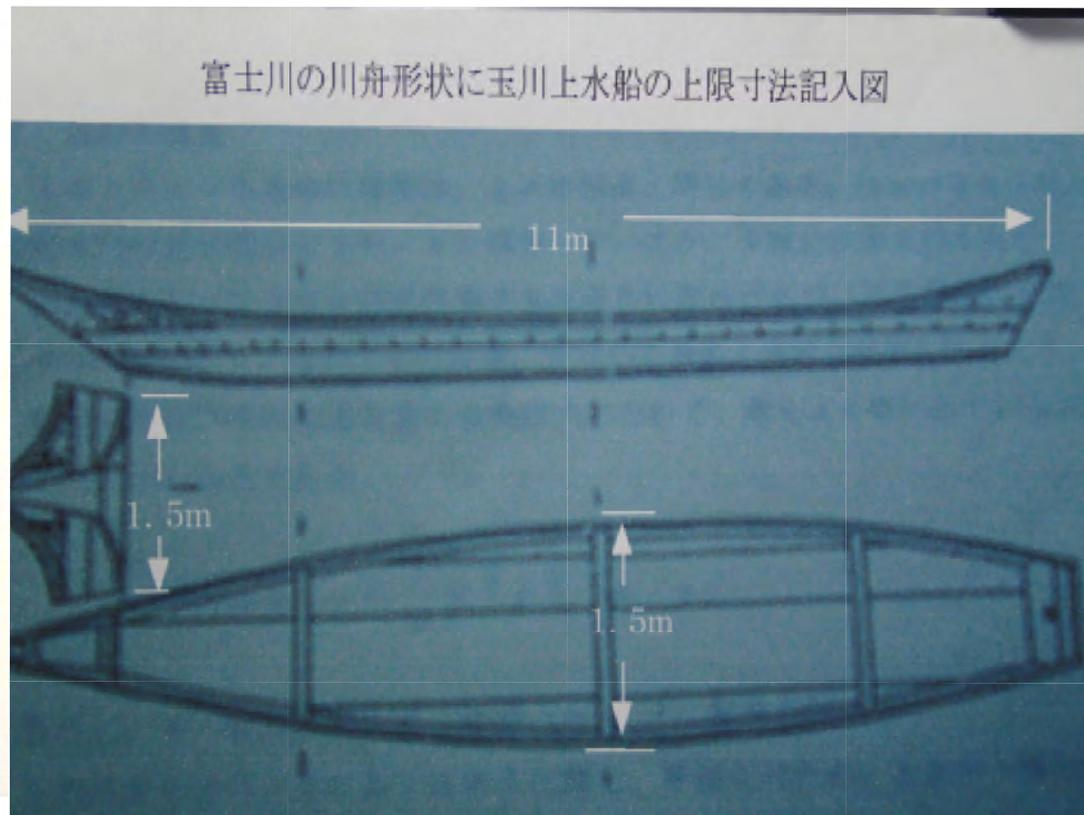
ふじがわ せんうん かじかざわ かし
 富士川舟運鰍沢河岸



甲州鰍沢乗船場

こうしゅうかじかざわじょうせんじょう

ふじがわ かわふね けいじょう たまがわじょうすい じょうげんすんぼう きにゆうず
 富士川の川舟形状に玉川上水の上限寸法記入図



めいじ ねん たまがわ じょうすいつうせんきょか お せんどう やまなしけん ふる かわ
 明治三年 (1 8 7 0) 玉川上水に通船許可が下りました。船頭は山梨県の古くから川
 ふね せんうん ひら ふじがわ ぞうせん ぎじゆつ はったつ こうしゅうかじかざわせんどう しょうすけ せんどう
 船の船運が開けた富士川の造船技術の発達した、甲州鰍沢の船頭「庄助」を船頭とし
 じょうせん ふじがわ せんうん するが かい むす せんうん ひら とくがわ いえやす
 乗船させました。富士川の船運とは、駿河と甲斐を結ぶ船運を開こうと、徳川家康が
 けいちょう ねん きょうと ごうしょう すみのくらしりょうい すいるかいはつ めいじ かいうん
 慶長 1 2 年 (1 6 0 7) 京都の豪商、角倉了以に水路開発を命じ開運しました。

かじかざわ ひきふね の ず (鰍 沢 曳 舟 の 図) (7) 玉川上水通船と船の運航

たか (高) せ 瀬 がわ 川 ひき 船 ぶね (の 曳 船)

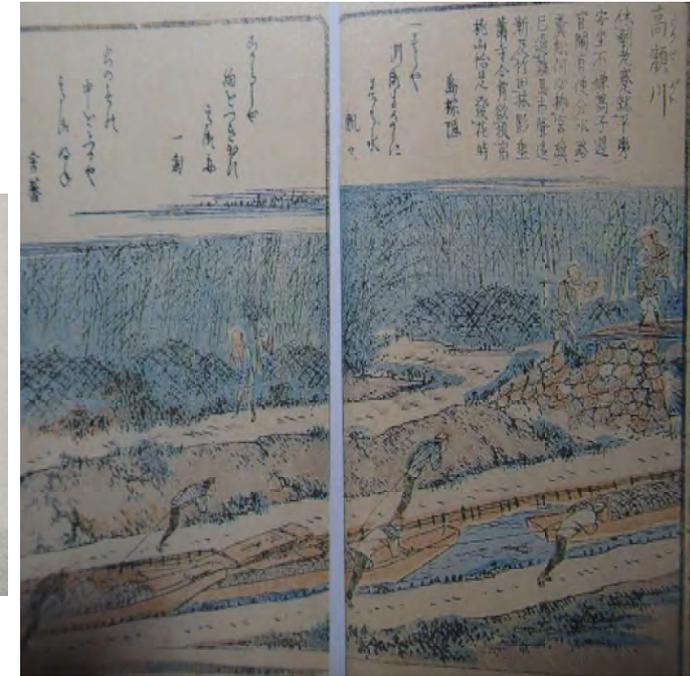


たまがわじょうすいひきふねどう (玉川上水の引船道)



図46 玉川上水の引船道

都市と廃棄物 Vol. 47, No. 7 (2017)



たまがわじょうすい すいりょう すく ばあい つうせん かくほ ため のぼ ふね くだ ふね とちゅう こうさ
 玉川上水が水量の少ない場合、通船を確保する為に、上り船と下り船が途中交差しな
 いようスケジュールで運行を調整しました。船は羽村から四谷大木戸までの間を荷物
 や人を乗せて運行しました。船には船頭一人、船子(乗組員)二人合わせて三人でし
 た。上りの船を曳く道を両岸に作りました。船を曳き上げる方法には、片岸で曳く、
 人で曳く、馬で曳く、両岸から曳くなどの説がありますが、玉川上水のように狭い水
 路では両岸から人力で曳く(高瀬川の曳舟)方式だったのではないのでしょうか。

参考文献：もうひとつの塩の道 フェルケール博物館 富士川舟運 玉川上水通船ノート(1) 玉川上水通船史料集 利根川叢書(1) 富士川町教育委員会

都市と廃棄物VOL.47 NO7 (2017) 多摩東京移管前史史料展史料集 「多摩はなぜ東京なのか」小平市中央図書館 編

(8) 玉川上水、船の乗客と運賃

すながわ 砂川

よつや おおきど 四谷大木戸



じょうせんきろく げんざい すながわまち ちょうめ よつや おおきど やく うんちん
 乗船記録によると、現在の砂川町三丁目から四谷大木戸まで約三十三キロの運賃が、
 くだ ひとり ぎん もんめ のぼ ぎん もんめ ひとり うんちん にもつ だ どうがく
 下り一人銀六匁、上り銀十二匁(註1)また一人の運賃が荷物一駄(註2)と同額であ
 りました。また乗客は、村役人、政府の役人の出張、商用、行楽(浅草のお西様参
 こがねいつつみ はなみ
 り)で小金井堤の花見などでした。

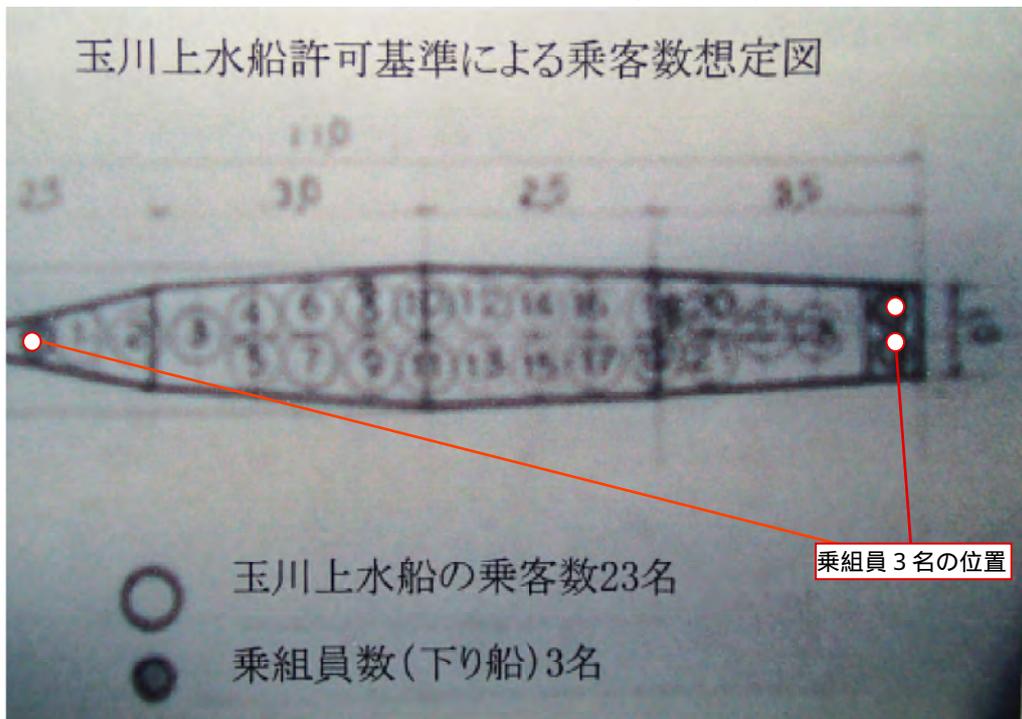
(注1) 現在の金額に換算すると乗客一人下り六千九百六十円・上り一万三千九百二十円 (注2) 馬一頭に背
 負わず荷重量(約40貫) 1貫=3.75kg 一駄=150kg

参考文献: 玉川通船ノート(1) 羽村市郷土博物館紀要第十一号

たまがわじょうすい ふね じじょう
 (9) 玉川上水、船のトイレ事情

たまがわじょうすいつうせん ふこくしよ きよかそうていず
 玉川上水通船「布告書」による許可想定図

じょうきやくすうていいん めい じょういんすう めい くだ ふね
 乗客数定員23名 乗員数3名(下り船)



べんおけそくめん
 (1) 便桶側面



べんおけだんめん
 (2) 便桶断面



しものせきしりつほうほくれきしみんぞくしりょうかんぞう

「下関市立豊北歴史民俗資料館蔵」

たまがわじょうすい つうせんきよか じょうけん べんおけひと ようい じょうせんしゃ
 玉川上水通船の許可条件の一つに「舟毎二便桶壺ツ用意のこと……」とあり、乗船者が
 じょうすい よご はいりょ めいじ ねん ごろ ふね べんおけ そな
 上水を汚さないように配慮したものです。明治三年(1870)頃の舟に便桶を備えた
 きろく たまがわじょうすいつうせんいちけん しりょう きろく べんおけ くわしい しりょう
 記録は「玉川上水通船一件」という史料に記録あり、便桶についても、詳しい資料はな
 めいじごろ しにょう うんぱんよう しょう べんおけ じょうきやくすう めいのり くみいん めい
 いので、明治頃に屎尿の運搬用に使用された「便桶と、乗客数約23名乗組員3名
 さんこう ひょうじ
 を参考に表示しました。」

たまがわじょうすい つうせん ねがいしよ やくそく ごと
(10) 玉川上水通船願書の約束事

たまがわ じょうすい つせん けん なか のなか しんでん げん こだいらし さだうえもん しゅつがん ないよう つうちょう けん はば しゃく すん ふめ
 「玉川上水通船一件」の中に野中新田（現小平市）の定右衛門からの出願の内容に「通長六間・幅五尺二寸の船...」

ふね ごと べんおけ ひと あてようい にかしよ やくそくごと やくそくごと つぎ じょうけん
 「舟毎二便桶壱宛用意...」の式個所約束事があります。この約束事とは次の二つの条件です。

ふね おお なが やく はばやく
 * 船の大きさは「長さ約10ト幅約1.5ト」

べいじふなずさんしやう
 * : 9頁舟図参照

ふね べんおけ いち こ
 船ごとに便桶壱個

やくそくごと つぎ ぎもん のこ
 ・これらの約束事には、次の疑問が残ります。

べんおけ ふね お
 ・便桶を船のどこに置くのか？

べんおけ だいべん しょうべん しょう
 ・便桶は大便、小便どちらでも使用できるか？

べんおけ だんじよきやうよう
 ・便桶は男女共用か？

ごもん しりやう
 これらの疑問がわかる資料はありませんでした。

べんおけ えど ばくふ たまがわ じょうすい いんりやうすい
 * 便桶について、江戸幕府は、玉川上水を飲料水と

すいしつ すいりやう たいせつ
 して、水質、水量とも大切にきてきており、

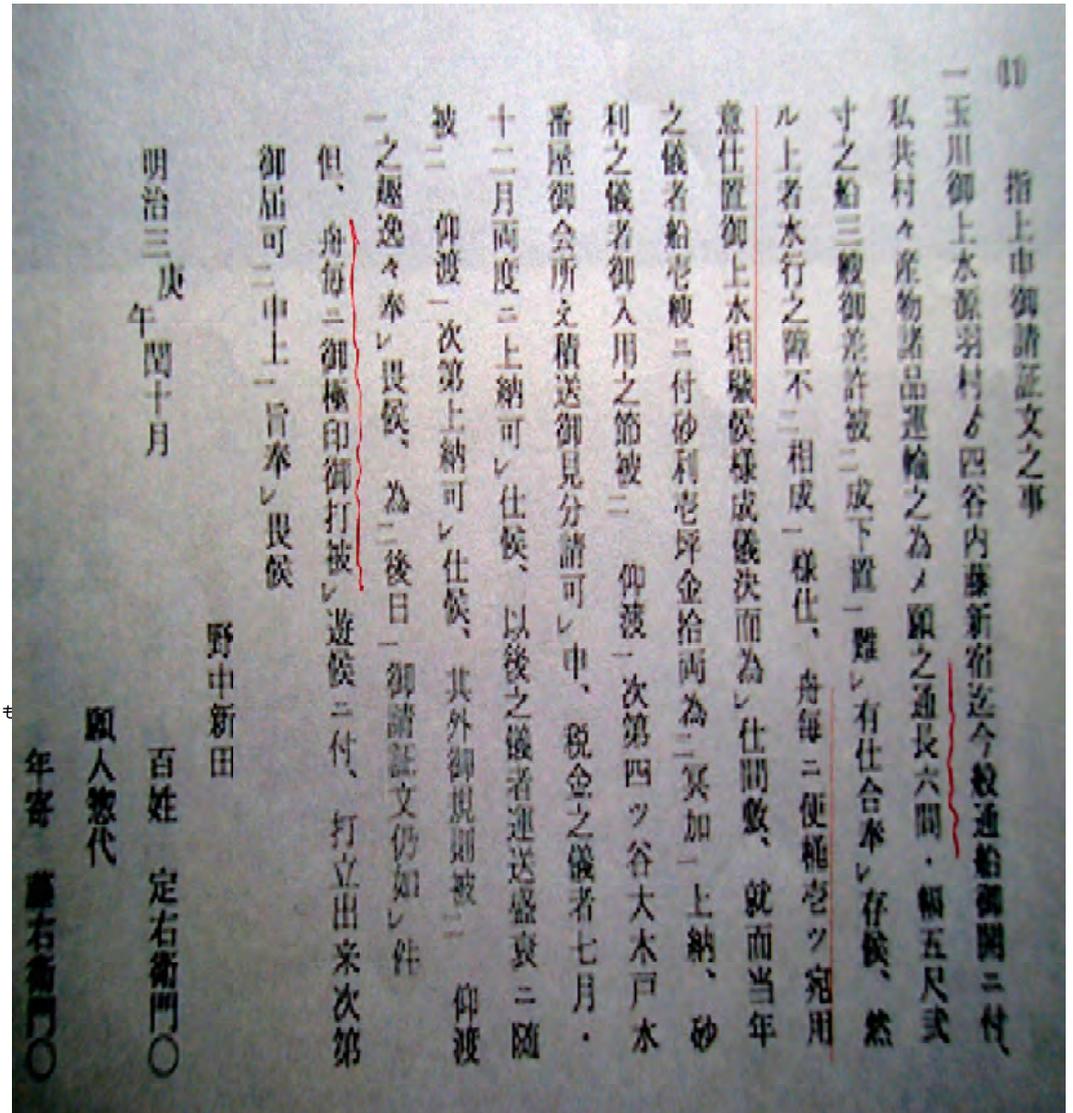
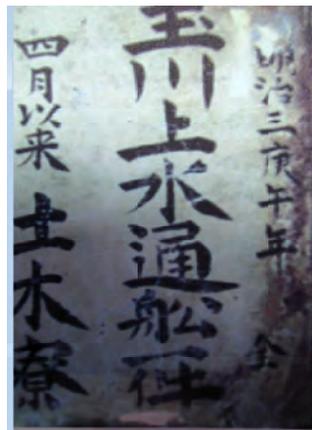
めいじせいふ つうせん じぎやう きやか かんが
 明治政府になっての通船事業の許可でもこの考え

まも べんおけ つうせん
 が守られ、便桶を通船の

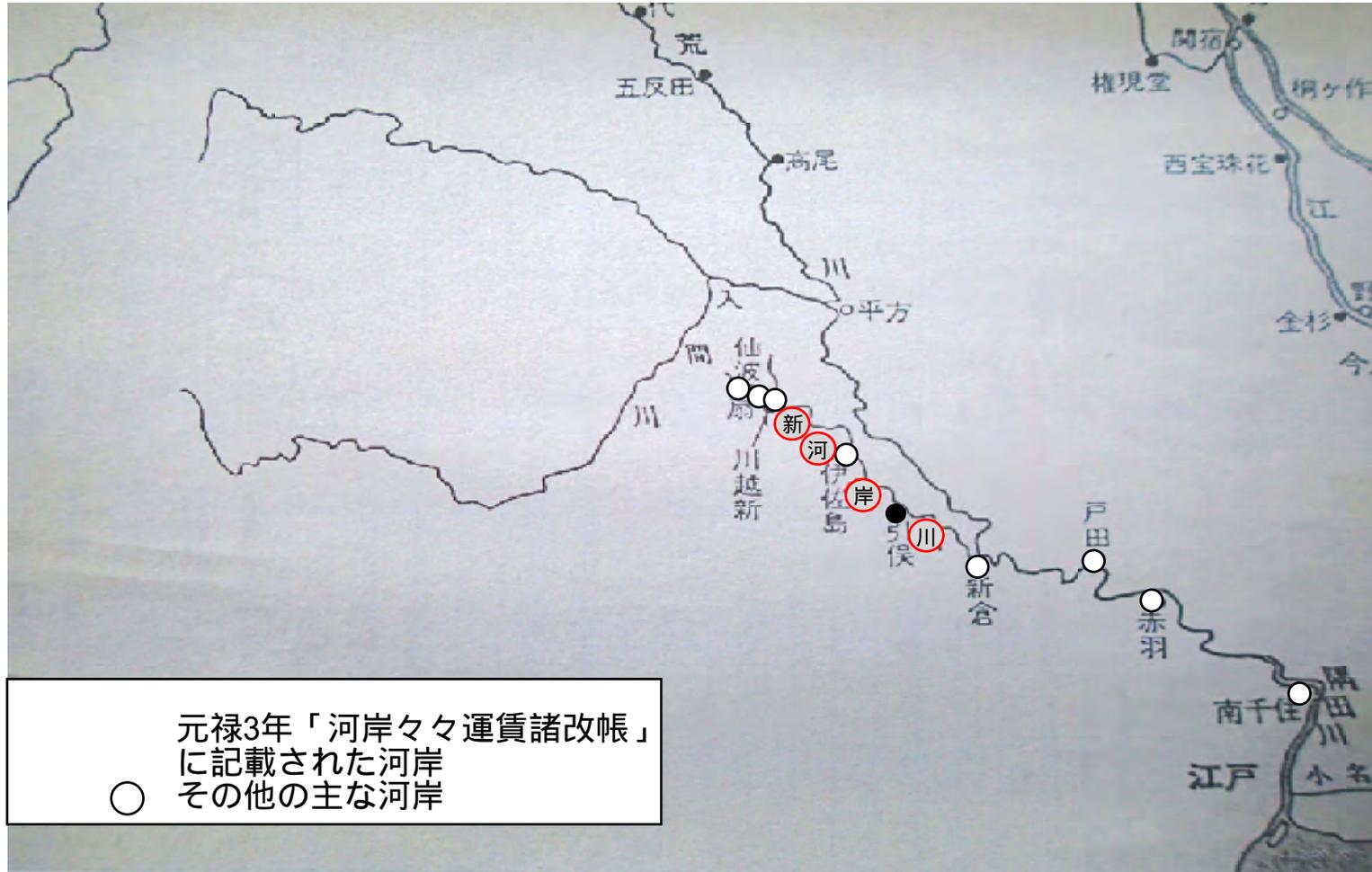
きやかじやうけん
 許可条件としたのではな

かんが
 いかと考えられます。

参考文献：
 玉川上水通船史料集
 玉川上水通船ノート（1）
 玉川上水通船ノート（2）
 玉川上水通船一件
 羽村市郷土博物館紀要第11号歴史手貼
 東京市史稿上水編第二
 玉川上水物語
 日本の上水



(1 1) 新河岸川の船運と川舟のトイレ (1)

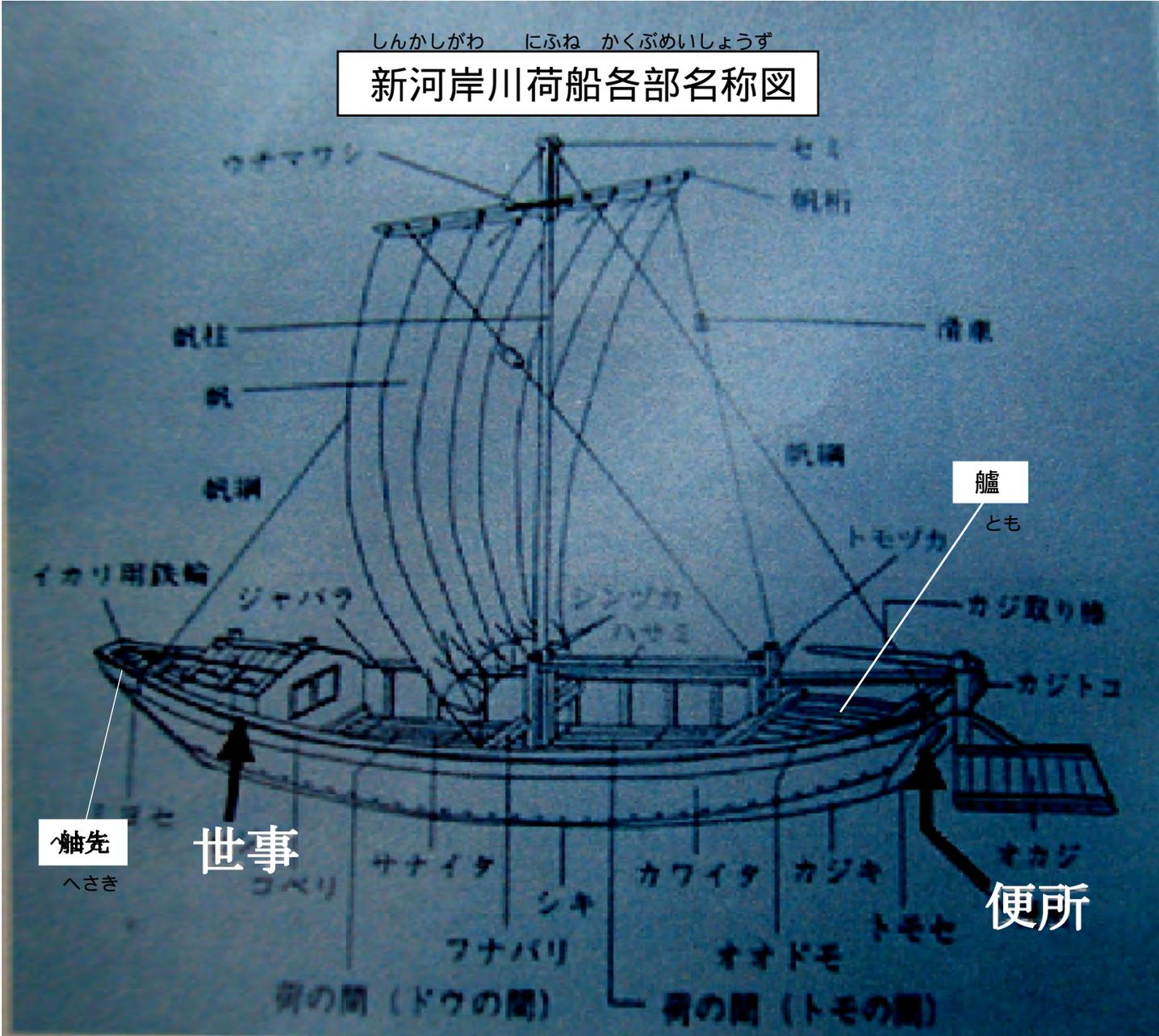


○ 元禄3年「河岸々々運賃諸改帳」
に記載された河岸
● その他の主な河岸

新河岸川は江戸中期から昭和初期まで、江戸と川越を結び、三百年間舟運は物資輸送に重要な役割を果たしてきました。仙波東照宮が寛永15年(1647)に焼失し、再建資材を運んだのが始まりで、本格的な船運が行われるようになり、川越藩主松平信綱の時代 正保元年(1644)河岸場(船着場)が点在し回漕問屋を中心に繁栄しました。

しんがしがわ せんうん かわふね
 (1 2) 新河岸川の船運と川舟のトイレ (2)

しんがしがわ にふね かくぶめいしょうず
 新河岸川荷船各部名称図



しんがしがわ にふね えど まつき ごろ
 新河岸川荷船は江戸末期頃

かいぞう せいじ へさき
 に改造され、「世事」も舳先
 がわ つ か とも
 側に付け替えられ、艫の
 かんばん た にふね な
 甲板には他の荷船には無い
 べんじょ もう
便所が設けられていました。
 かんばん ちょうほうけい あな
 甲板から長方形の穴をあけ、
 ちよくせつすいちゅう お
 直接水中に落ちるようになって
 っていました。

はば せま しんがしがわふね せい
 幅の狭い新河岸川船は、世
 じ ちい たたみ まい こたつ
 事も小さく畳二枚で炬燵も
 しちりん にたき
 なく七輪で煮炊きしていま

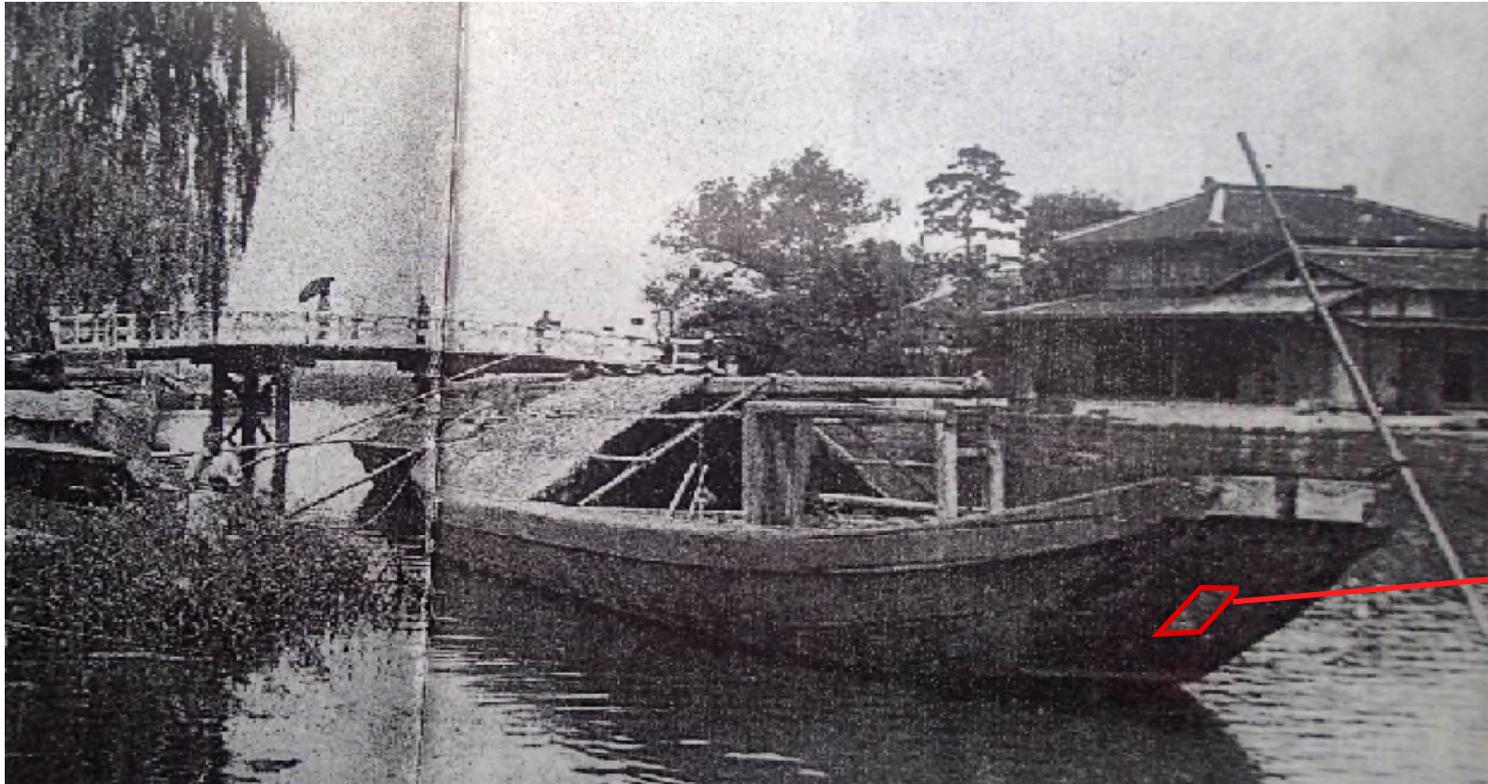
しんがし あらかわ で
 した。新河岸は荒川に出る
 かわはば せま もやい
 まで川幅が狭くそのため舫

で き げせん ようた
 注1 が出来なく下船して用足
 でき
 しが出来ませんでした。

もやい
 注：舫とは川の上流・下流双方の双方の船の交差すること

参考文献：武州川越舟運 さきたま出版会

しんがしがわ せんうん かわふね
 (1 3) 新河岸川の船運と川舟のトイレ (3)



だいしょうべんちよくせつ

大小便直接
放出する穴

ほうしゅつ あな

しん がし がわ ふね べんじょ つ ふね べんじょ うみふね ばあい だいしょう
 新河岸川の船には便所をなぜ付けたのでしょうか？船の便所については、海船の場合大小
 べん とも ちよくせつうみ ほうしゅつ うみ みなと しゅっこう りく はな おき で しゅう
 便は艫から直接海に放出していました。海では港を出港すると陸を離れ沖に出るので、周
 い ひと め な あんしん ようべん できる かわふね ばあい しゅつぱつ とうちやく
 囲の人の目が無いので安心して用便が出来るからです。川船の場合は、出発から到着まで
 しゅうい ひと み でき しんがし がわ ふね とも かんぱん ちょうほうけい あな ちよくせつ
 周囲の人から見られて出来ません。新河岸川の船は艫の甲板に長方形の穴から直接できる
 せんどう ろ かじ あつか じよせい なんぎ
 がそこは船頭が櫓や舵を扱うところで女性は難儀だったのです。

とも ふね こうほう
 艫：船の後方

参考文献：武州川越舟運 さきたま出版会

(1 4) 新河岸川の船運と川舟のトイレ (4)

しんがしかわ こうこう たかせぶね
新河岸川を航行する「高瀬船」

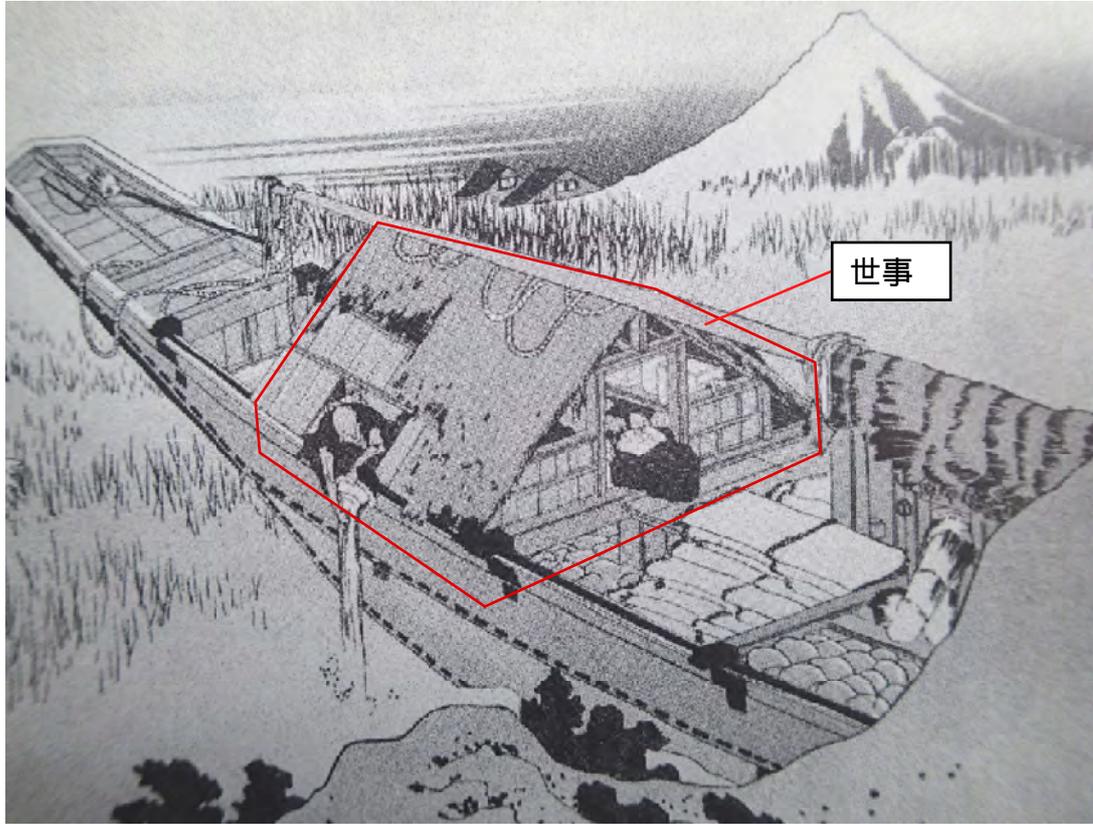


えど ていきせん ひと はこ
江戸への定期船として人を運んだ、有名な「川越夜船」は、荷物をつ積む「荷の間」に筵を敷いて、屋根にはアシ注1の葉で編んだ「苫」注2掛けにして雨や寒さを防いで人を乗せました。客を乗せる川越夜船は、川越から江戸浅草の花川戸までおよそ一昼夜（約二十二時間）でした。

せんだう さお ねん ろ みつき い さお いちにんまえ あやつ なが としつき ひつ
船頭になるためには「棹で三年櫓で三月」と云われ棹を一人前に操れるには永い年月が必要で、並船とって夫婦二人で船暮らしする人もいました。世事注3は二畳程度の畳が敷かれ炊事道具一式の他に船タンス・木製の銭箱などの生活用品を船に持ち込んでいました。

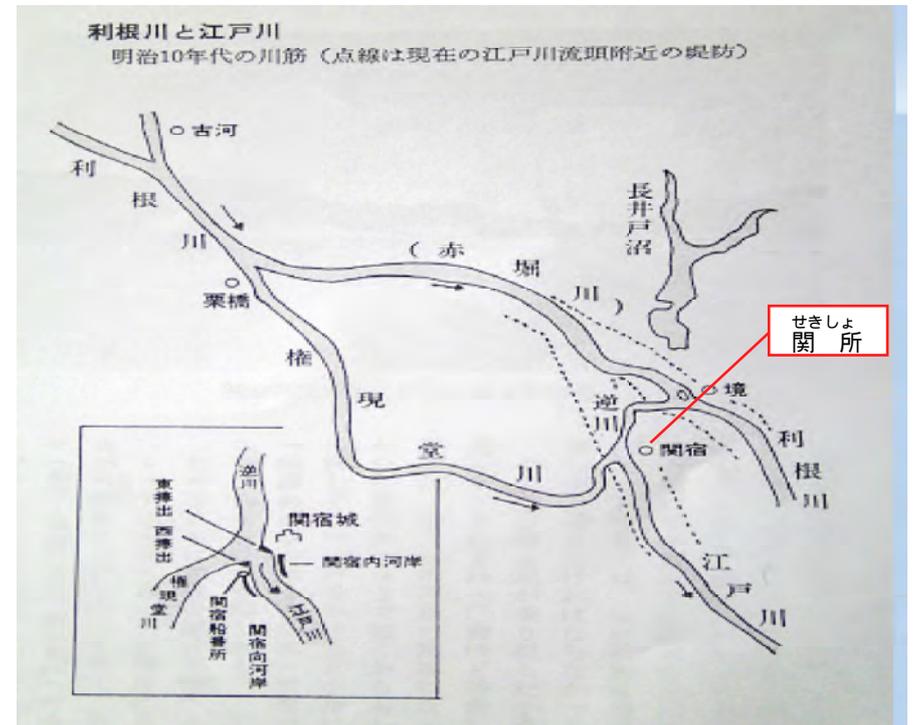
注1 アシ：イネ科の多年草 注2：小舟などの上や小屋の周囲にかぶせ驟雨を防ぐもの 注3：小舟に設置した屋根付き部屋

とねがわ えどがわ せんうん
 (1 5) 利根川と江戸川の船運



えどがわ い ぐち せきしょ せきじゅくふなばんしょ
 江戸川の入り口に関所（関宿船番所）が
 あ やくめ いりてっぽう でおんな けん
 有りました。役目は、入鉄砲・出女の検
 さ おこな めいじ
 査が行われていました。明治になって
 たか せふね じょせい の く たか
 高瀬船に女性が乗り組むようになり、高
 せ ふね せいじ よ きょしつ のり
 瀬船には「世事」と呼ぶ居室があつて乗
 くみいん しんじょく
 組員がここで寝食をともししていました。

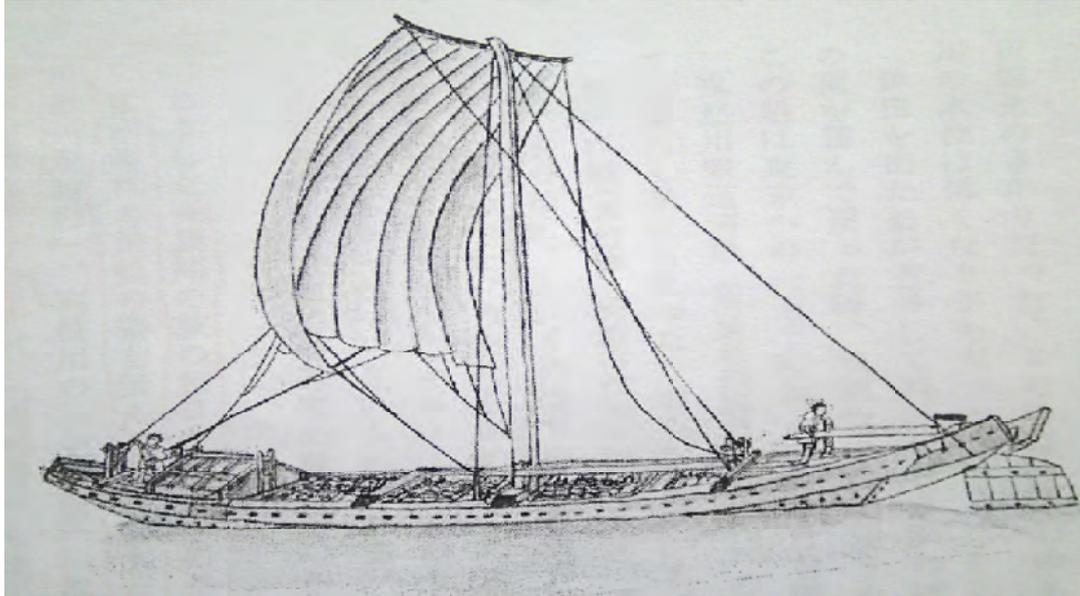
とねがわ えどがわ
 利根川と江戸川図



かつしかほくさい じょうしゅううしほり ふがく けい うち
 「葛飾北斎の常州牛堀（富嶽三十六景の内）」

せいじ すいじ ま せんたい ちゅうおうぶ
 世事は、「炊事の間」のなまり、船体の中央部
 ひだりがわ えどこうき さいこうび は だ
 左側でしたが、江戸後期には最後尾の張り出し
 ぶぶん きょしつ せんたいないぶ すいじば せんたいじょうぶ
 部分で、居室は船体内部で、炊事場は船体上部
 お ひ みず つか かんけい
 に置かれたのは、火や水を使う関係でした。

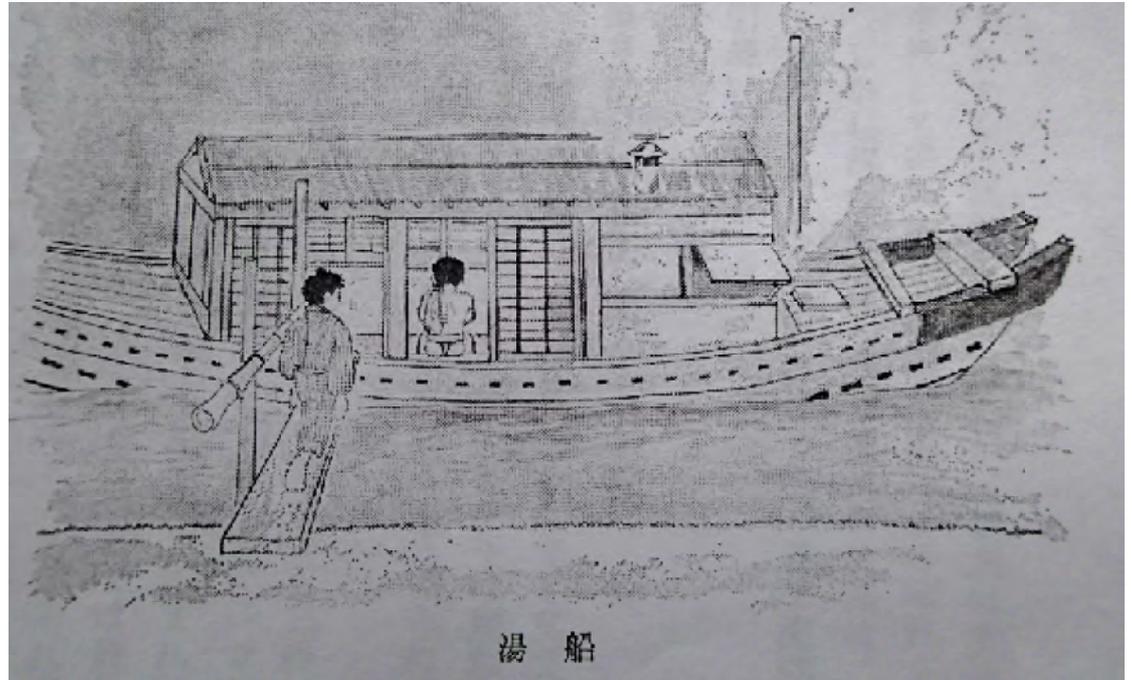
とねがわ たかせ ふね せいかつ
 (1 6) 利根川高瀬船の生活 (1)



利根川高瀬船

ふね せいかつしゃ おか せいかつ おな かんが
 船の生活者は陸の生活と同じと考えてい
 ました。周囲は水だから便利で、炊事、
 しゅうい みず べんり すいじ
 洗濯、洗面、用足し(便所)は川の水に
 せんたく せんめん ようた べんじょ かわ みず
 直接大小便を流しても「三尺下れば水
 ちよくせつだいしょうべんなが さんじゃくくだ すい
 じんさま きよ しんこう ふね
 神様が清めてくれる」という信仰が船で
 せいかつしゃ じっかん
 の生活者の実感でした。

にゅうよく ふね
 しかし入浴だけは船ではできません。
 ゆふね えいぎょう おこな
 そこで湯船の営業が行われていました。
 かわすじ ようしょ せきじゆく おざき のだ ながれやま
 川筋の要所「関宿・尾崎・野田・流山・
 まつど いちかわ ゆふね げんえき しりぞ
 松戸・市川」などの湯船は現役を退いた
 ろうせんだう ふる ふね よくしつ だついじょ もう
 老船頭が、古い船に浴室と脱衣所を設け
 おか あ ひろ わた いた て
 陸に上がる広い渡り板に手すりもつけて
 いました。

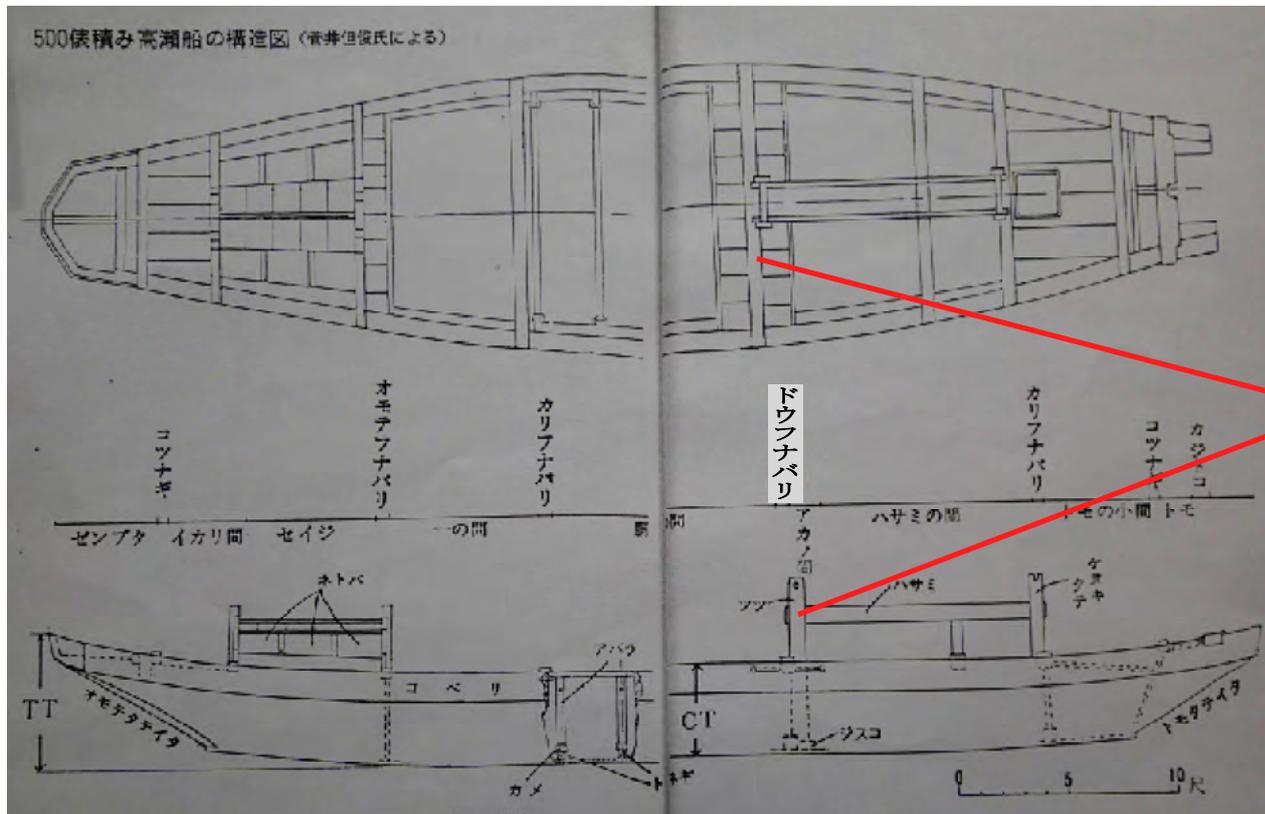


湯 船

湯 船

(17) 利根川高瀬船の生活(2)

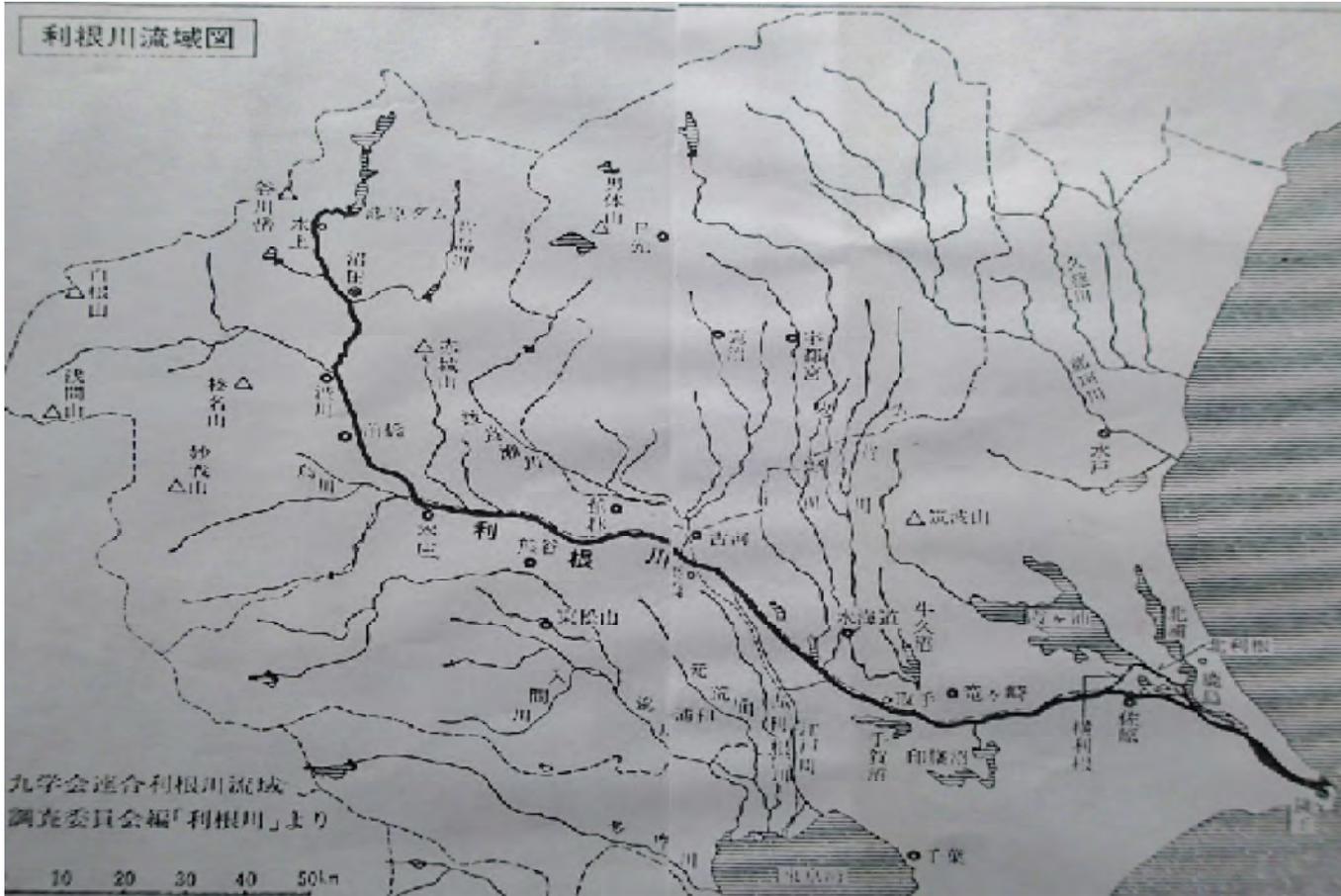
五百俵積み高瀬船の構造図



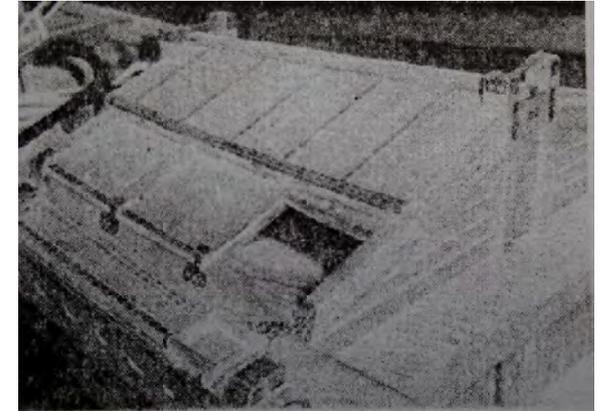
高瀬船の乗組員の男達は船で用を足していました。トイレの無い船では、用を足すには、もっとも水面に近く中央部、胴船梁のあたりで川の中にすうっと沈むと大変気持ちがいい。また引退して船を下りたが陸の便所は臭いし、ハエがいやなので、毎朝船だまりに行き「大川で尻を洗って、すっきりしていい気分だった」と、元船頭さんが話たそうです。

(18) 利根川高瀬船の生活 (3)

とねがわりゆういきず
利根川流域図



たかせぶね もけい み せいじ
高瀬船の模型に見る世事



せいじ ないぶ そうぞうず
世事の内部想像図



世事のある川船は関東の高瀬船だけで、高瀬船とは世事のある大型船ということになります。初めは関東の川船も苦^{註1}で仮屋根囲いをしていましたが、船が大型化すると常設の船室が必要になり、(15)の「北斎の絵」で見られる簡素な造りから「模型に見る」世事の造りに進化しました。しかし残念ながら便所^{べんじょ}はありませんでした。

参考文献：利根川高瀬船 利根川叢書(1) 著者渡辺貢二 斎書房出版(株)

苦：とま：舟などのうえや小屋の周囲にかぶせて風雨を防ぐもの

よどがわ こくぶね
 (1 9) 淀川の三十石船

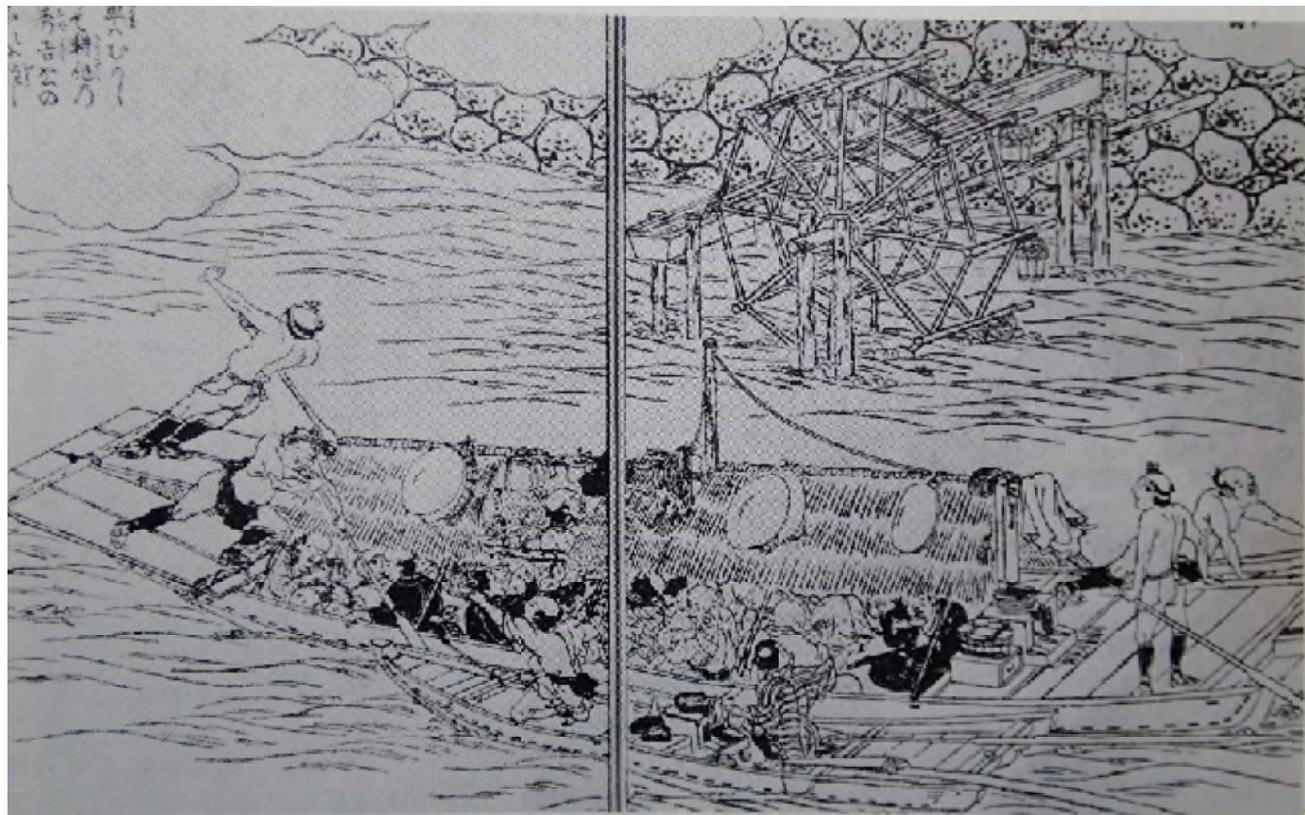
こくぶね はつちやく きょうとふしみ
 三十石船の発着の京都伏見



おおさかはちけんや
 大阪八軒屋に着いた三十石船



よどがわ くだ こくぶね
 淀川を下る三十石船



きょう おおさかかん じょうげ の あい ふね そう ふね じょうきゃくていいん にん せんだう にん
 京・大阪間を上下する乗り合い船で、一艘の船の乗客定員は二十八人で、これを船頭四人
 うんこう せんちゅう ようす どうかいどうちゅうひざくりげ へんじょう くわ か よどがわ
 で運行しました。船中の様子は「東海道中膝栗毛」六編上に詳しく書いてあります。淀川
 こくぶね きょうと ふしみ しゅぱつ おおさかはちけんや しょうじかん くだ ふね はんいち のぼ ふね
 の三十石船は京都の伏見を出発し、大阪八軒屋に所要時間は、下り船は半日、上り船では
 にちまた はんや ふね じょうきゃくくろう じべいじ せつめい
 一日又は半夜でした。この船にもトイレはなく乗客の苦勞を次頁で説明します。

とうかいどう つぎ みや あつたじんぐうもんぜんまち
 東海道五十三次「宮」は熱田神宮門前町



くわな しちり わた ぐち
 桑名 七里の渡し口



とうかい どうちゅうひざくりげ せんちゅう
 (20) [東海道中膝栗毛] 船中のトイレ(1)

ねん ぶんか ねん とうかいどうちゅうひざくりげ へんじょうげ
 1805年(文化2年)「東海道中膝栗毛四編上下」
 あかさか くわな せんちゅう じじょう かいせつ
 (赤坂-桑名)の船中のトイレ事情について解説
 やじ きた あつた みや わた くわな しちり
 弥次北は熱田の宮の渡しから桑名までの七里(約2
 わたしぶね わた やじ せんちゅう しょうべん
 8キロ)を渡し船で渡った。弥次さんは船中の小便
 つかう たけ つつ やど ていしゅ う と せんちゅう にょうびん
 に使う竹の筒を宿の亭主から受け取り船中で尿瓶の
 か つか かんが やじ せんちゅうたけ
 代わりに使おうと考えていた。弥次さんが船中で竹
 つつ しょうべん ふね なか しょうべん
 の筒に小便すると、船の中が小便だらけになった。
 やど ていしゅ たけ つつ さき しょうべん で
 宿の亭主は竹の筒の先から小便が出るようにしてお
 いてあった。船頭は船の中に小便すると、船霊さま
 せんどう ふね なか しょうべん ふなだま
 が穢れる。早く捨てると怒っている。船は尿尿を船
 ない た とくべつ ばあい いがい
 内に溜めることは、特別の場合以外はしませんでした。



長さ66cm 竹径3cm
 火吹き竹

ちずじょう ふごう とうかいどうごじゅうさんつぎみや わた
 地図上の符合 — 東海道五十三次「宮」の渡しルート

参考文献：東海道膝栗毛(上)【全】2冊岩波クラシック22 岩波書店

ふなだま
 船霊：船の安全を守る神様
 けが
 穢れ：不潔。・不浄

(原文) 伏見の京橋(伏見区)にいたりけるに、日も西にかたぶき、往

来の人足はやく、下り船(大阪へ下る船)の人集める船頭の声やかま

しく「さあさあ今出るふねじゃ。のらんせんか。大阪の八軒じゃ。

「ハハあ これが、かの淀川の夜船」(昼間荷を積んで夜、人を運ぶ)



弥次
こくふねよどがわ よぶね
三十石船淀川の夜船



おさかはちけんや
大阪八軒家

こくふね べんじょ ろうじん しびん も こ
三十石船には便所がないので老人は尿瓶を持ち込ん

で小用する。かくて船は、枚方すぎたころ、篠をつ

く大雨となり苦注1ももれば、船頭もはたらき自由な

らず。やがて堤に船をこぎよせ、.....

弥次「時に北八またこまったことがあるわい、雪陣へ

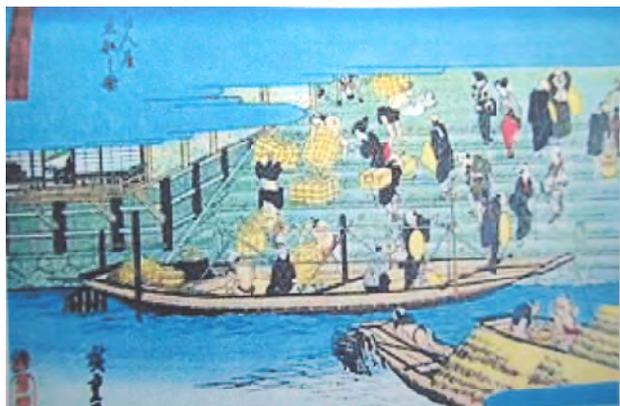
ゆきたくなつた。

弥次「どふも船ではできぬ。イヤさいわい、

ここにかかっているうちに、ちよつくら

どて
土手へあがって、やらかしてこよう」。

ふね きやくろうじんしびん
船の客老人の尿瓶



(22) 両国川開きに便所船登場

めいじ ねん がついつか どうきょうあさひしんぶん だい ごう きじ
明治四十年八月五日「東京朝日新聞」第七千五百三十號 記事

さく や りょうごくかわびらき 昨夜の両国川開

はなび しっぱい
花火は失敗

げんいん しゅう あめ
原因は驟雨(にわか雨)

けんぶつせん しゅ れい き りょう
見物船の主なるもの 例によりてこの機を利用する

だんたい こじん こうこくてき けんぶつせん おお なか とく めだ
団体個人の廣告的見物船の多かる中に特に目立ちたる

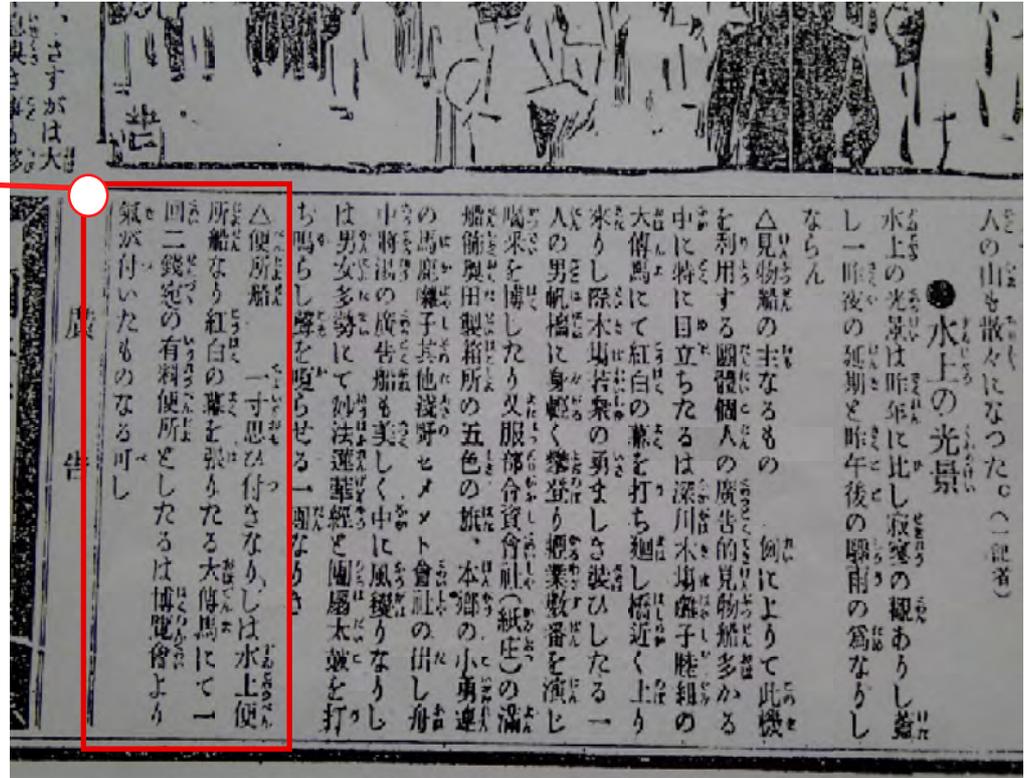
ふかがわ きば はやし むつみくみ だいてんま こうはく まく う まわ
は深川木場囃子睦組の大傳馬にて紅白の幕を打ち廻し

はしちが のぼ き さい きば わかいしゅう いさ よそほ
橋近く上り来たりし際木場若衆の勇ましき装ひしたる...

すいじょう こうけい さくや ひ せきれう くわん けだ さくや
水上の光景は昨夜に比し寂寥の観ありし蓋し一昨夜の

えんき さく ごこ しゅうう ため
延期と昨午後の驟雨の為なりしならん

べんじょせんきじ
便所船記事



べんじょせん 便所船

ちよいと おも つ すいじょう べんじょせん こうはく まく は だいてんま かい せん
一寸思ひ付きなりしは水上便所船なり紅白の幕を張りたる大傳馬注1にて一回二銭
宛の有料便所としたるは博覽會より氣が付いたものなる可し。

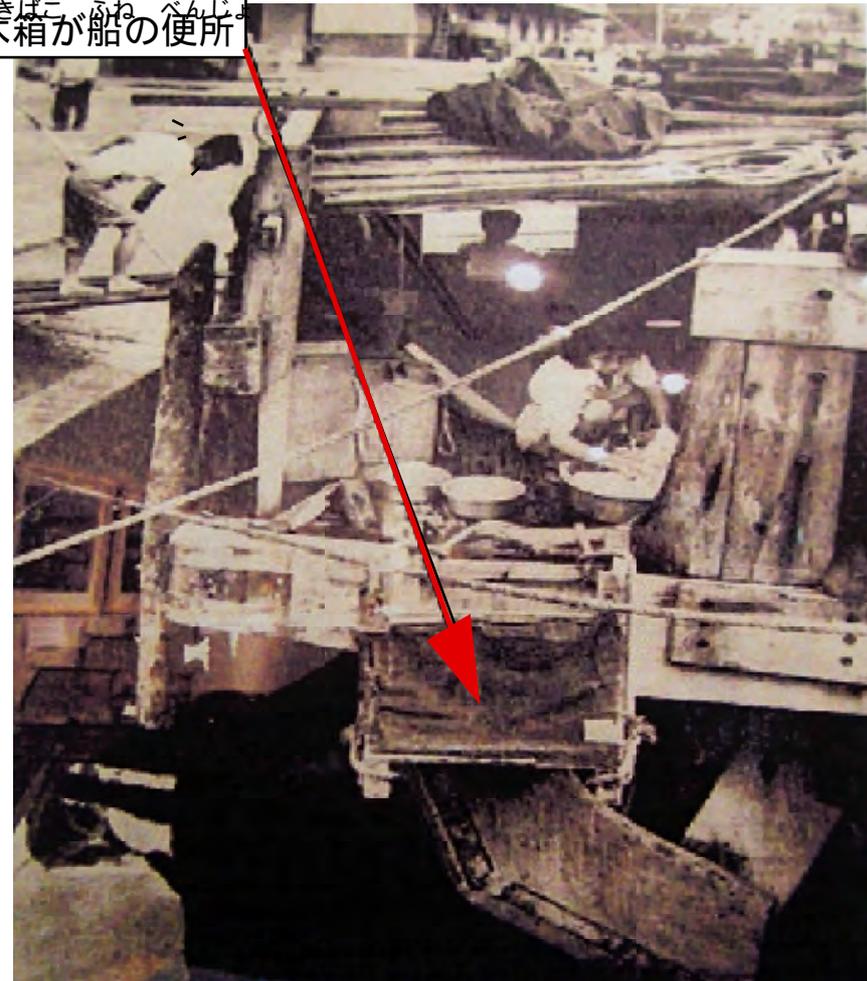
注1 大傳馬：伝馬船には、小伝馬・大伝馬・小買伝馬・耕作小伝馬等の種類がある。

(24) 家船と小型漁船のトイレ(1)

昭和30年代頃までは、家船の集落は、農村より便所の数が少ないと云われていて
原因は耕地を持たない漁村では、糞尿は始末にこまり、嘗ての香港の蛋民のように東
南アジアでは海中に家を支える杭を建て、上に家を作って生活している民族がいま
して船と区別が付きません。水上生活では糞尿を容易に処理できるので便所を作りま
せませんでした。

船尾の木箱が船の便所

右の写真は、神戸港の水上生活を
する人たち、仕事を待つ間、炊事
洗濯などを行っています。
船尾の木箱から直接海に糞尿を放
流するのです。

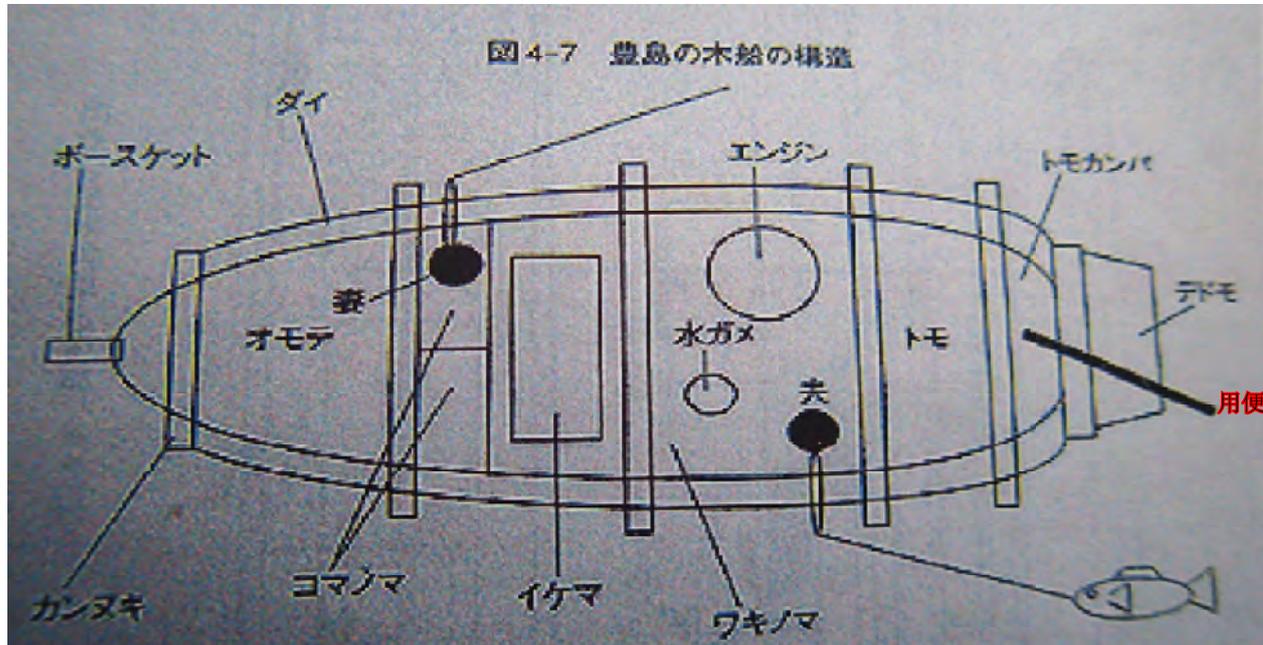


昭和30年頃 村上 要氏 撮影

参考文献：日本歴史民俗論集8・漂泊民族文化 吉川弘文館

(25) 家船と小型漁船のトイレ(2)

日本の家船の漁民は、瀬戸内海が圧倒的に多く、なかでも広島県が多い、広島県には最後の船住まいと云われた二窓浦(芸予諸島)注1の漁船の生活様式で、船の呼称は船首(ミヨシ)に向かい左舷側(トリカジ)右舷側(オモカジ)、船は六つの部屋にくぎられています。船首(ミヨシ)から船尾(鱸)に向かい、表の間小間、胴の間(生け間)、脇間、ヒヤ間、トモ間とよばれています。寝室は、表の間、胴の間の下は、(生簀)で海水が循環しています。ヒヤ間に接してオモカジ側が主として炊事に使い、生ゴミ、汚物はオモカジ側から海中に捨て、**用便**はトモの間から海中に向かって行きます。



ふたまどうら ねんがつくれしへんにゅう
二窓浦は2005年3月呉市編入



(26) 家船と小型漁船のトイレ(3)

えぶね うみ と ぎょかいりい りくち みんな こうえき せいけい いじ さかな
家船は海で獲った魚介類を陸地民と交易することにより、生計が維持できます。魚
のうか も い こくもつ こうかん しごと おも じよせい しごと かいいきない きち
を農家に持って行き穀物と交換する仕事は主に女性の仕事でした。海域内の基地の
じぶん とくいさき たず ぶつぶつ こうかん おこな えぶね じよせい こうえき かつどういがい
それぞれ自分の得意先を訪ね「物々交換」を行います。家船の女性は交易活動以外
すいじ せんたく もちろん ろ こぎ えぶね じよせい せんじょうせいかつ
にも、炊事、洗濯、は勿論、櫓漕までしていました。家船の女性の船上生活におい
ばんおお なや こども はな せいかつ つぎ ふね べんじよ な ちい
て、一番大きな悩みは、子供と離ればなれの生活、次に船に便所の無いこと、小さ
みなと ていはく じよせい ふろ せんたく ばしよ さが せわ
い港に碇泊すると、女性たちはまず、風呂や洗濯できる場所を探す、そして世話に
のうか さが ぶつぶつこうかん
なる農家を捜して、「物々交換」をしました。



しゃしんせつめい
写真説明

きゅうしょうが えぶね おやこ
旧正月を家船のトモでくつろぐ親子
ひろしまけんおのみちし
1858年(昭和33年)広島県尾道市

ふね こうび ぶぶん
トモ：船の後尾の部分

参考文献：日本民族写真大系 瀬戸内海の東西
発行所：株式会社 日本図書センター

日本歴史民俗文化 吉川弘文館

(27) 家船と小型漁船のトイレ(4)

沿岸の漁師は沖に出るときはドンザ()を着て沖箱(ハコマクラ)を持って出ています。
 遠くの漁場へ出漁するときは、炊事できるように窯や寝具など生活必需品を舳先
 甲板の下に入れ、航海の安全と豊漁を祈願した神仏が船に祭典されました。
 船梁の区切り方は、地方性があり、また船種によっても異なります。船には便所は
 ありません、夫婦船では、男性は船縁から直接海へ、女性は、半日程度は我慢する
 がやむを得ず行う場合、生間にしゃがみ行う事があります。生間は船底にあけ
 た穴から海水を自由に出入りさせ、魚を生かしておく生簀と船底に溜まった滄を汲
 み出す所です。



伝馬船は約7メートルの長さがあり(サザエ・アワビワカメ・ヒジキ)などの漁に使用する。

(*) ドンザとは漁師の着る防寒着

参考文献：下関市豊北民族博物館蔵 取材協力：下関豊浦漁協

(2 8) 昭和の家船のトイレ位置

現在の船は船体はFRP船（グラスファイバー）で出来ており、船の装備は、自船の位置を測るGPSが装備されて近海での遭難は少なくなりました。



船の構造や機能などが大きく変わって、漁民の生活も陸上の民と変わらなくなり、信仰はまったく薄れ、家船にも便所がつけられたが、やはり便所の位置は昔の信仰の位置についています。

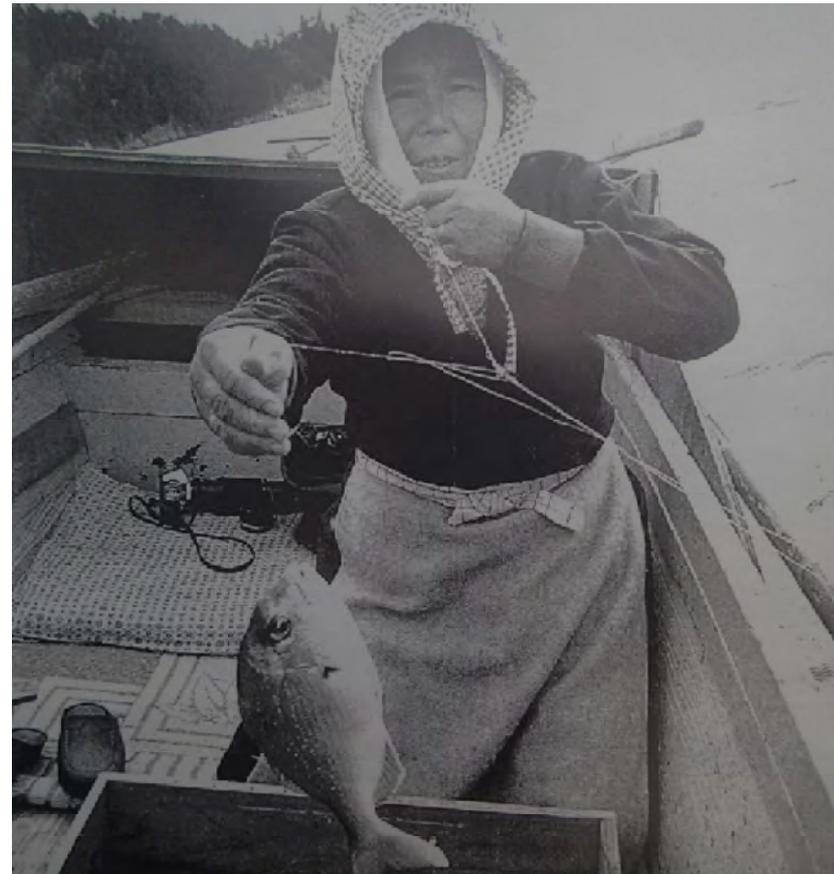


(29) 長崎県家船の生活様式

生涯を海上の小さい船で過ごす家船の人達の生活様式は、陸で住む民とは異なった面が多く、長崎県の家船で見ると、結婚の披露宴は盆・正月に根拠地に帰った時に、家船の中で行われます。また家船での死者は、遠くにいる場合でも、根拠地の家船墓におさめる。用便は船から海中にする。船尾につかまって尻を海中に突き出すか、海浜の岩陰などです。家船には糞尿の肥料は不要で、陸上生活の根拠を構えてもなかなか便所を作らない。

ふね みず はこ しゅふ
バケツで船に水を運ぶ主婦

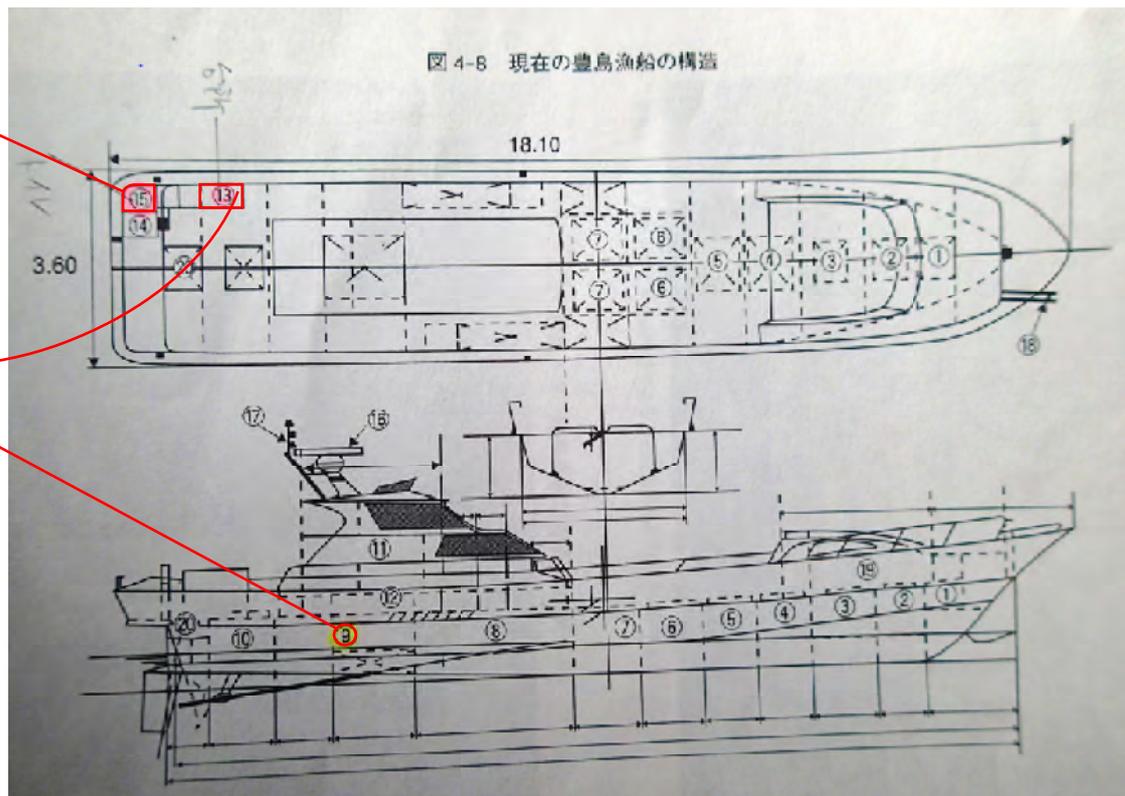
だんせい ふね こ じょせい りょう
男性が船を漕ぎ、女性が漁をする



(30) 家船生活の豊島漁民

豊島では、家船民のことを「夫婦船」「所帯船」とよばれ、現在は日帰りの生活を営んでいる夫婦船でも長期間漁に出ることがあるからです。図は1996年に建造された豊島漁船です。この船は140馬力FRP船で魚群探知機、無線、レーダー、GPSなど設備があります。

船の構造からみると、トイレが左舷にあり。船室には二~三畳ぐらいの畳が敷かれており、布団・枕などが整頓されています。流し台はトイレは四方を囲む形となっているが、上下は空いている。洗濯ものは甲板の上にナイロン縄をかけて吊るすが機関室に干す場合が多い。従来家船の民は、船自体が生活の場で作業の場でもある、また移動手段でもありました。

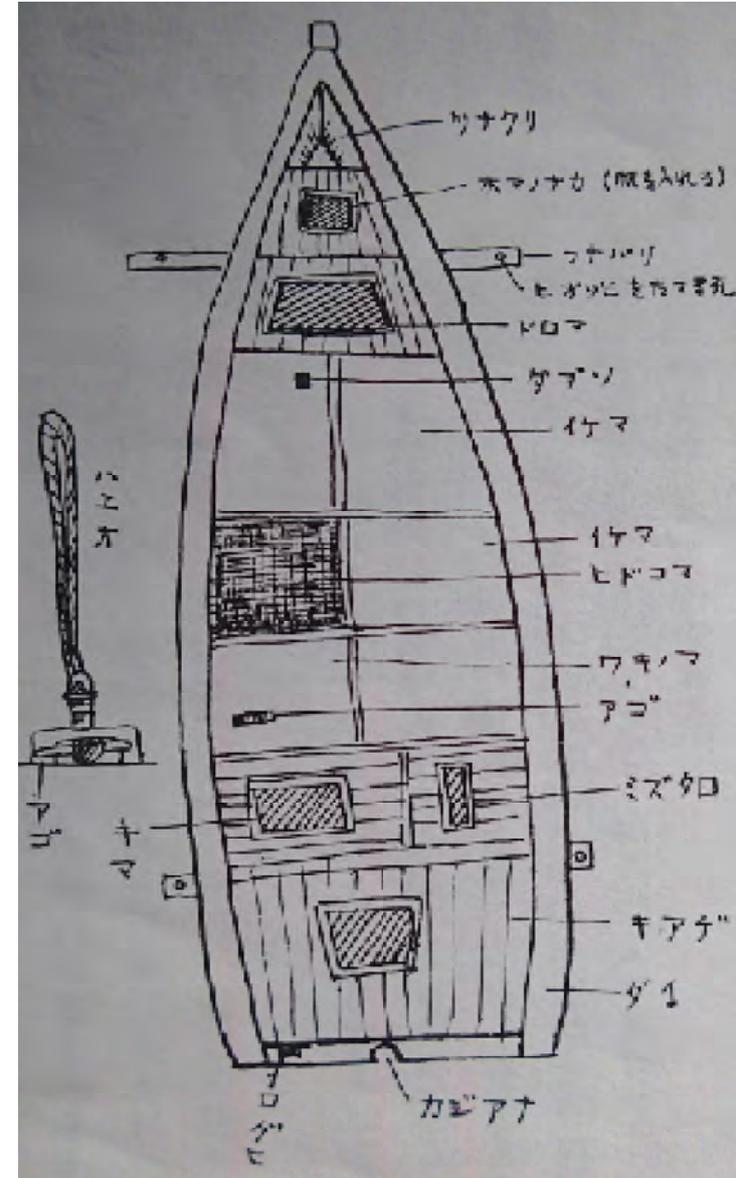


(3 1) 沖家室島の家船の便所事情

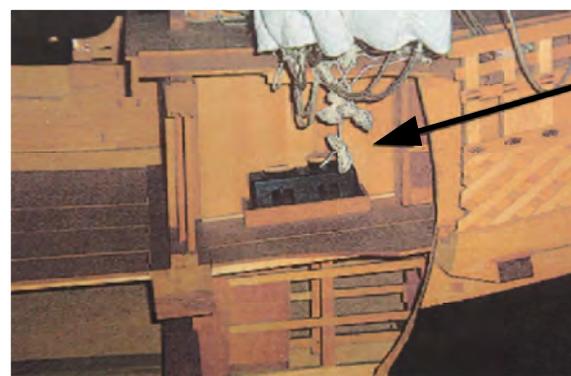
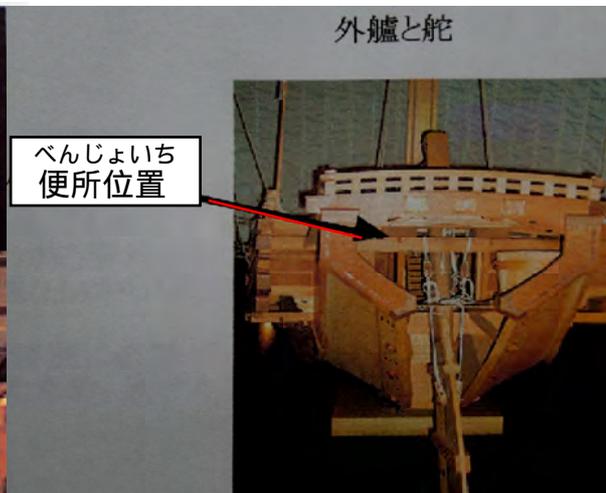
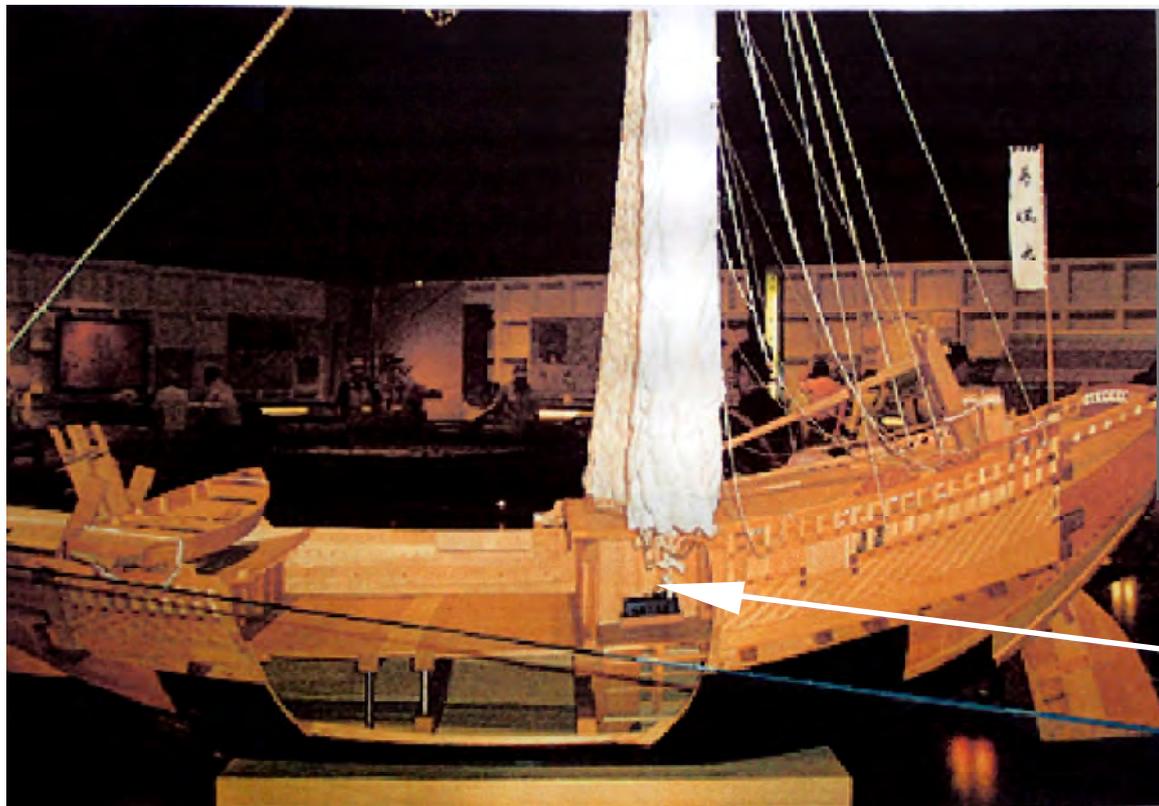
そとうらおきかむる ぎょせん
外浦(沖家室)の漁船

この島の漁船は、独特の形態を留めており、家船の生活形態が陸に上がったと考えられる島ではないかと思われます。現住する戸数は約三七〇戸余に過ぎない島で、徳川幕府時代発達した、漁師の集落であるとともに、瀬戸内海の帆船航路にあたり、重要な船着場でもあります。

この島は、本浦と洲崎の二つに分かれており、両浦の間にはトンネルが一つあります。家は密集し、道も1.5メートル内外の幅で狭いし、家は一間ないし三間くらいの小さい家が多く、家に前庭を持つ家はほとんどありません。ほとんどの家は入口に小便壺があり、家に入る人は小便してから中にはいる様になっています。家の中には便所がなく、家船の生活様式が、陸の便所に引継がれたと考えられています。



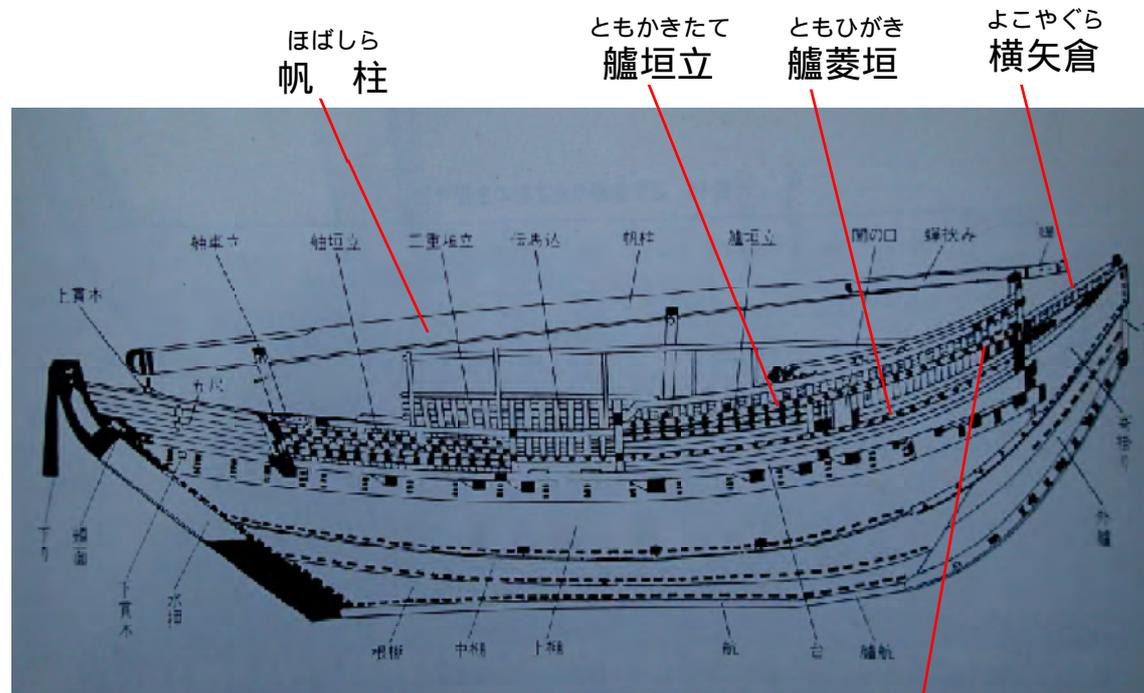
(32) 弁財船 (千石船) の便所



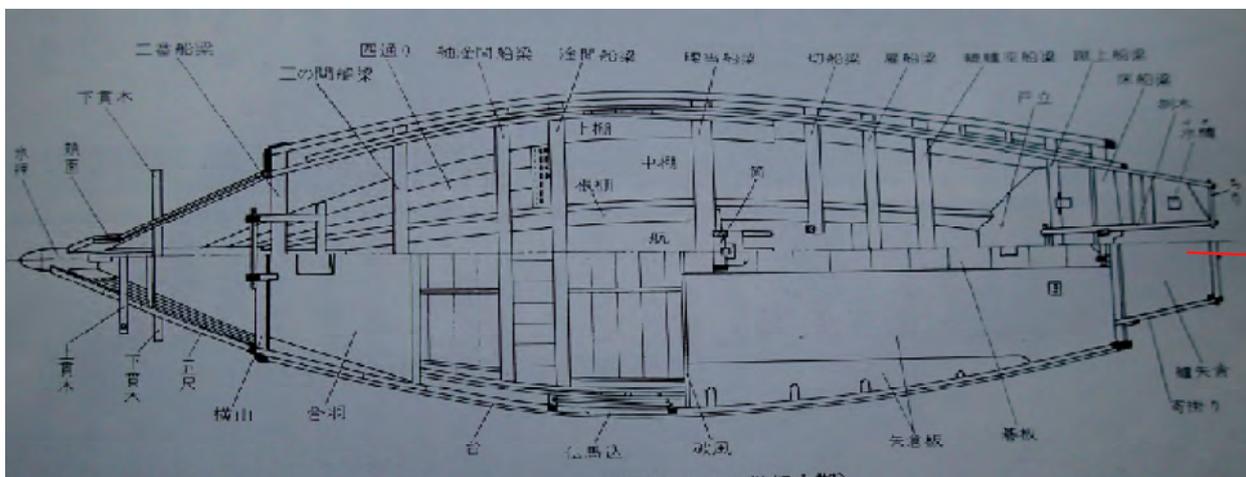
千石船の名前で江戸時代から明治の中頃まで日本の流通産業の中心的な役割を果たした大型船でした。乗り組み員は千石積級で12～15人前後で、写真の船名は、「寿悦丸」で大阪から江戸の間を定期船として就航し、上方から、木綿、油、紙、などを積んだ船で、文化期（1804～17）に描かれた1千500石積の菱垣廻船の図をもとに復元された模型です。便所は位置を示しているが特別に便器等の設備は無く艫から海に放尿・排便をしていました。

(33) 弁財船「浪華丸」復元帆走試験

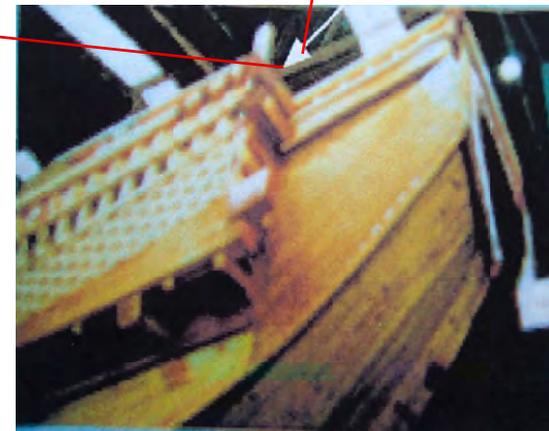
平成十一年七月二十日「浪華丸」帆走試験が行われ、船内部の乗組員の居住空間を復元し海上生活がわかる資料がないのが残念でした。関係者は船には便所が無いので、帆走時には艫から「図示位置」放尿したが過去に実働時も同じ状況では、との説明でした。



浪華丸 平面図



帆走試験従事者の放尿位置

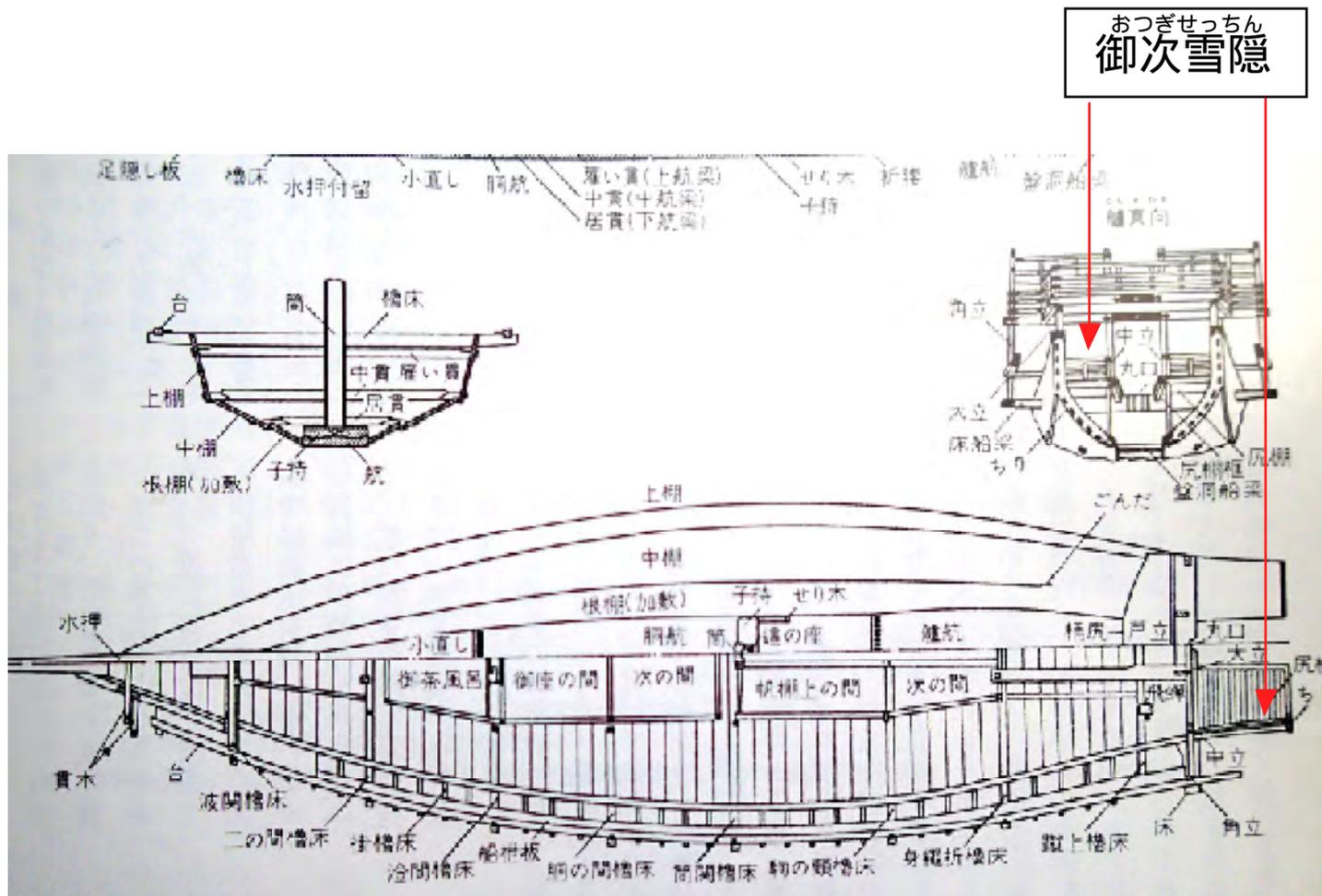


ちり知里

(34) 熊本藩の御座船「泰宝丸」

江戸時代の関船は、幕府の水軍抑制策で技術的な進歩がなくなっていました。中国四国地方の諸大名は、参勤交代のさいに大阪までを海路としていました。実力五百石以下の範囲内で大、中、の関船を建造し、御座船を含む船団を編成していました。

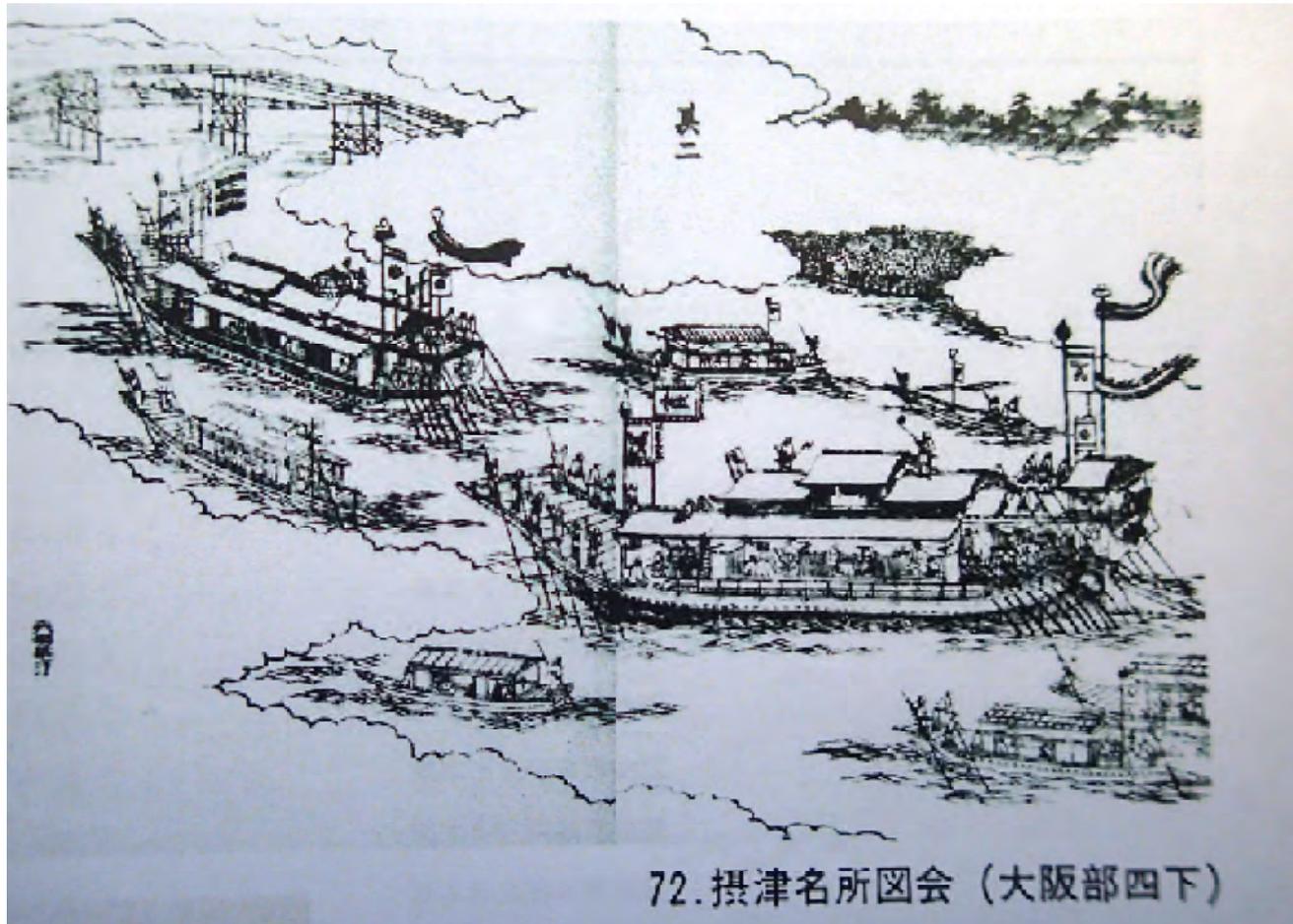
御座船のトイレは、船尾の舵床の後、左舷甲板に長方形の穴を水面に向けて「あけてあり、立派な蓋がしてありました。このトイレは将軍や殿様以外の下級武士の人々の用に供されたのでしょう。殿様やお姫さまは専ら「おまる」を用いたとなっております。



(3 5) 川御座船のトイレ事情

川御座船とは、河川で使われる大名の御座船で、特に幕府の川御座船は、迎接用で、四艘の豪華な屋形船を大阪に常備していました。下図は琉球使節一行を乗せた川御座船で、先行する船が、宇和島藩、あとの一艘が長州藩の船印が見えます。江戸時代の御座船の便所は、船尾舵床の後ろ、左舷甲板に長方形の穴を水面に向けてあけてあり、立派な蓋がしてあり、将軍や殿様以外の人々の用便に使用した

トイレでした。



72. 撰津名所図会 (大阪部四下)

ずせつわせんしわ
参考文献：図説和船史話 至誠堂
日本海事叢書
和船探求覚之書

(3 6) 海御座船のトイレ事情 (1)

海御座船は、九州や瀬戸内、四国など西国諸大名が参勤交代で領国と大阪の海路を往復するために使用されたもので、下図の左の大きな船が大櫓四十六挺の「波奈之丸」で万延元年（1860）の帰国の際に描かれた絵馬です。

御座船以下百二十三艘の船団を組み、藩主一行千八百八十六人を、船頭・水手等の総勢二千五百六十三人の人々で運び、長い航海と総数延べ三千七百余の人達の、食料・屎尿処理・入浴・飲料水・等、日常生活などの必需品確保の作業は、随行する専門船がそれぞれ対応していました。屎尿についても、専用の用船（**厠船**）が付いていました。

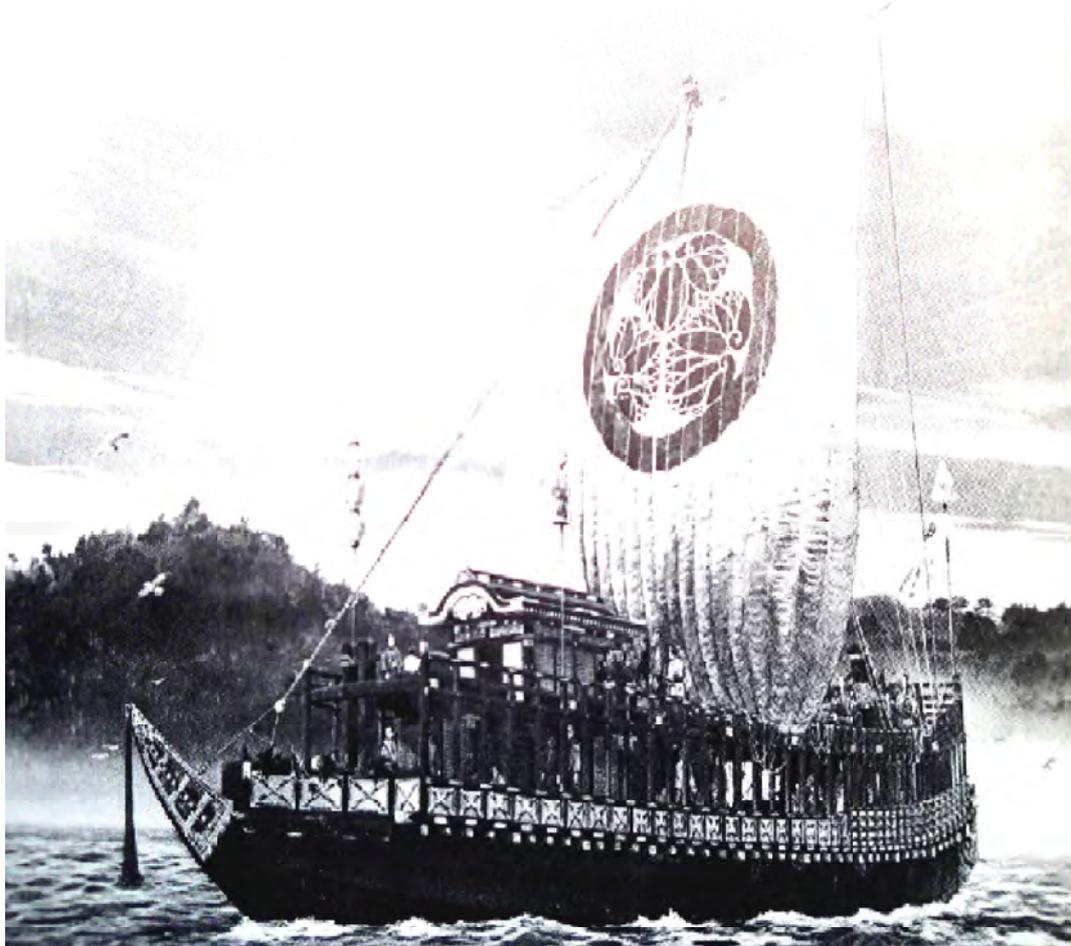
帰国する藩主を乗せて豊後鶴崎に入る熊本藩の船団

ござふねなみなしのまる
御座船波奈之丸



(3 7) 海御座船のトイレ事情 (2)

しょうぐん ござふね てんちまる かんえい ねん さんだいしょうぐんいえみつ ござふね けんぞう
 将軍の御座船「天地丸」、寛永七年(1630)三代将軍家光が御座船として建造
 しました。おおがたせきふね てんけい あたけふね きんし か しょだいみょう もはん
 大型関船の典型として安宅船禁止下の諸大名の模範となりました。
 ふなぎょうれつござふね ちゅうしん こ ぶね はしぶね みずぶね だいどころぶね ともぶね ようせん さきてぶね
 船行列は御座船を中心に、漕ぎ船・橋船・水船・台所船・供船・用船・「先手船」
 は、お召の船を曳く役、「橋船」船にて橋の役目をする、「水船」船中に水櫃を据



おき みず たくわ つ ぶね
 え置き、水を蓄え積む船、
 くりや ちょうり
 厨船、調理をするところ、
 ともぶね ぎょうれつ とも ようせん
 「供船」行列の供、「**用船**」
 ござふね つ かわやぶね など ぶね
 御座船に付く **厠船**、等の船
 せんたん くむ
 で船団を組みます。



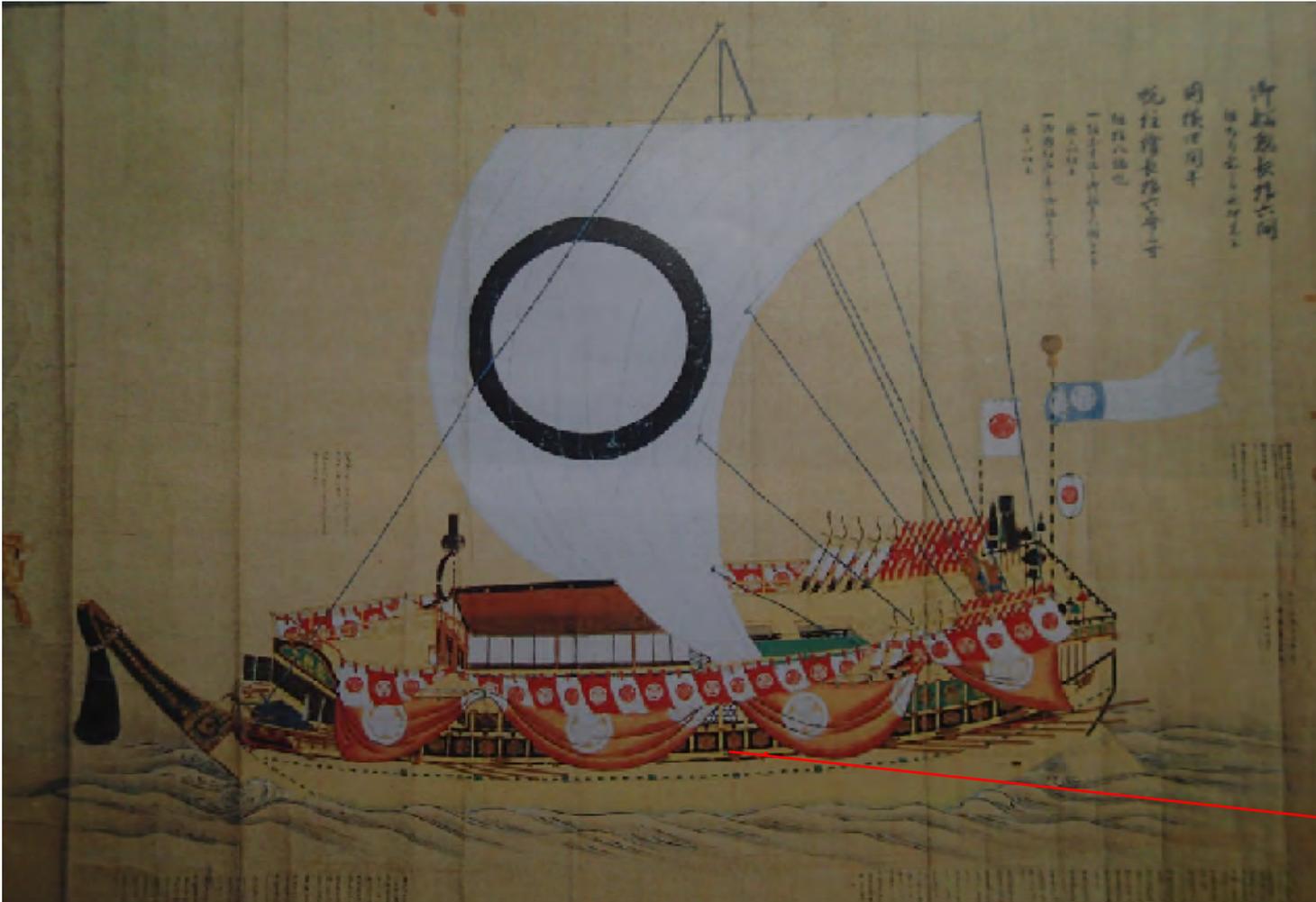
注：水櫃とは、大型のはこで、上に開くふたのついたもの

参考文献：図説和船史話 至誠堂

「現代の御座船」2014年6月16日東京新聞

たかまつ はん ひ りゅうまる しょうさいず
 (3 8) 高松藩飛龍丸詳細図 (1)

さいごくしょだいみょうさんきん こうたいよう ござぶね かしい きそ たかまつはん ひりゅうまる おめ
 西国諸大名は参勤交代用の御座船の華麗さを競い、高松藩の飛龍丸もそうした御召し
 せきぶね だいろ ちょうだて たんぼ さいだいきゅう ふね ふね せつちん こうしょう
 関船でした。大櫓五十二挺立十八反帆の最大級の船でした。この船の雪隠・小用所
 いち かず しめ ばしょ しょうさい いち じべいじ
 の位置は下図に示す場所にあります。(詳細位置は次頁にあります)



ふね こうちょう しゃく
 この船の航長65.1尺 (19.
 かたはば しゃく
 7 m) 肩幅22.3尺 (6.8m
 だいろ ちょうだて おお
) 大櫓 5 2 挺立で大きさ
 しょうぐん ござぶね てんちまる
 は将軍の御座船「天地丸
 ひつてき ふなべ
 」に匹敵する。船边には
 かもんいり まく めぐ
 家紋入りの幕を巡らし、
 せんじょう のぼり ふ なが
 船上には幟や吹き流しを
 た ぶぐ なら
 立て、武具が並べてあり
 ます。

注：大櫓とは、櫂に似た、船を漕ぎ進める道具

おせつちん おこようしょ

御雪隠・御小用所

(3 9) 高松藩飛龍丸詳細図 (2)

ともましようめん だんめんず

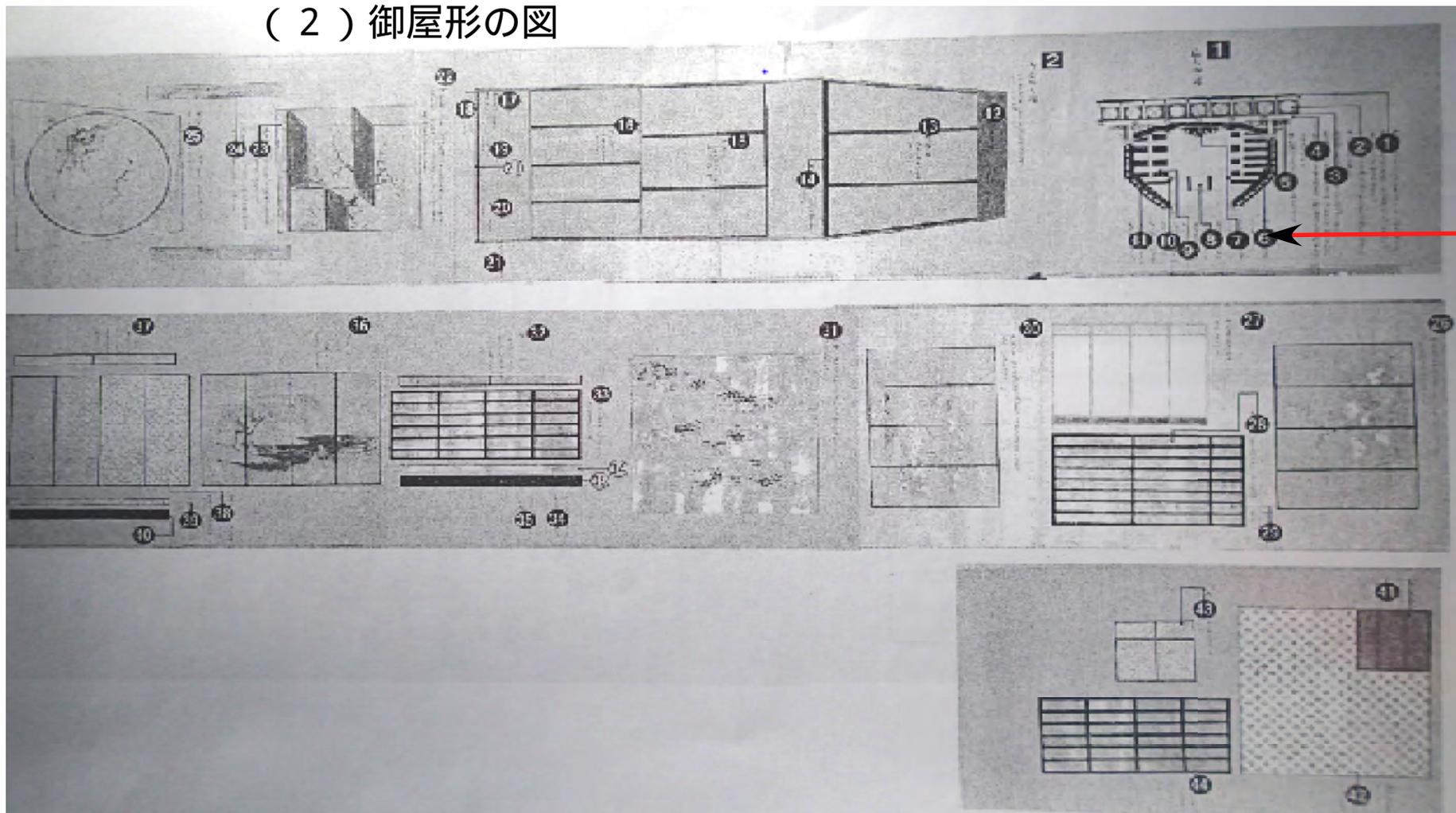
(1) 艫真正面の断面図

おんつぎせっちん かこ すぎ すりいた くるぬり

御次雪隠注1にて、囲いは杉の習板のような黒塗りとする。

おんやかた ず

(2) 御屋形の図

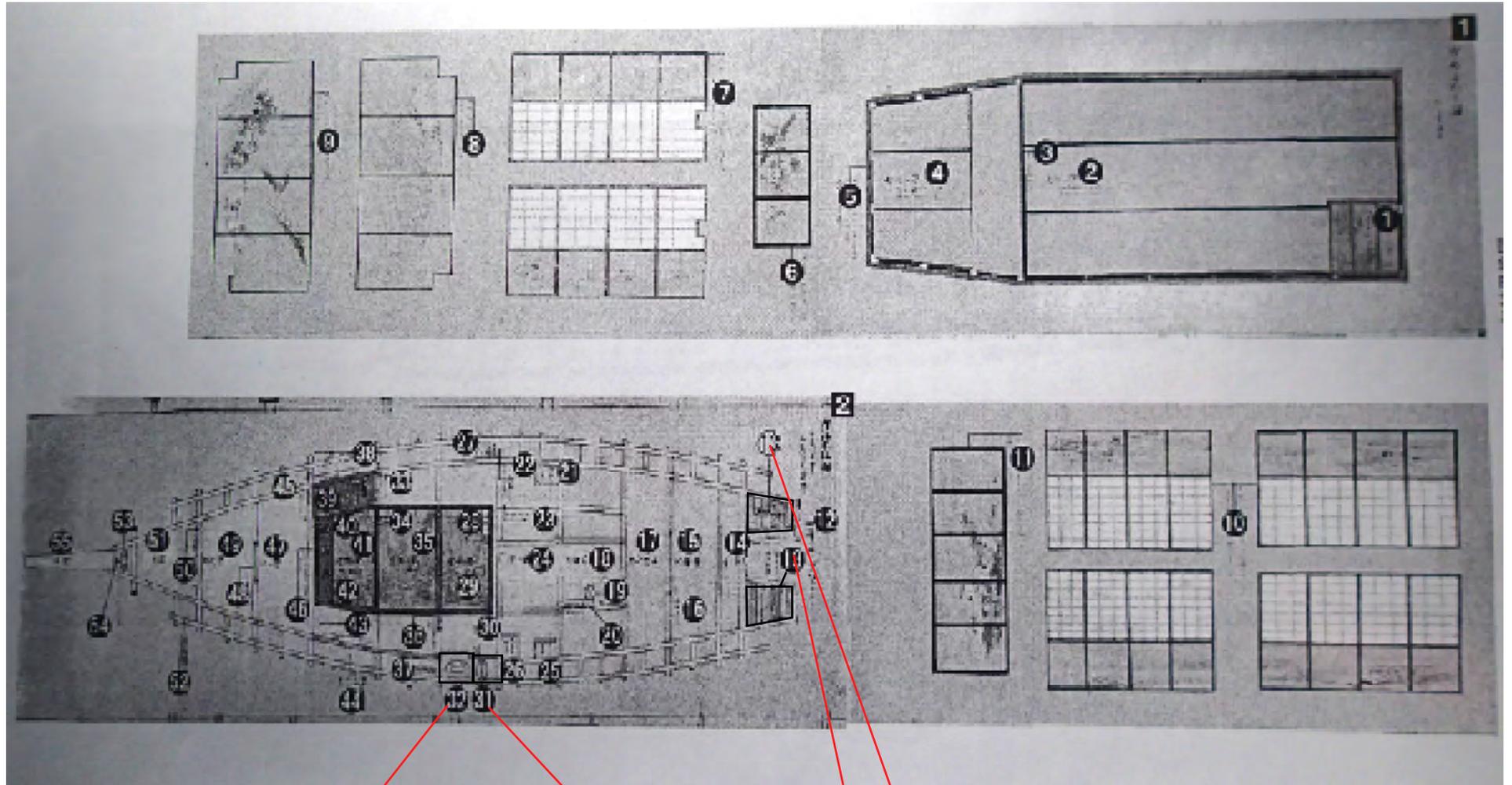


おつぎせっちん

御次雪隠

たかまつ はん ひりゅう まるしょうさいず
 (4 0) 高松藩飛龍丸詳細図 (3)

おんふね ひらえず
 (2) 御船平絵図



3 2 御雪隠
 おせっちん

3 1 御小便
 おしょうべん

この二箇所は
 御次雪隠
 おつぎせっちん

御次雪隠：殿様以外が使用する雪隠

瀬戸内資料館提供
 参考文献：香川県歴史博物館蔵

資料調査概報

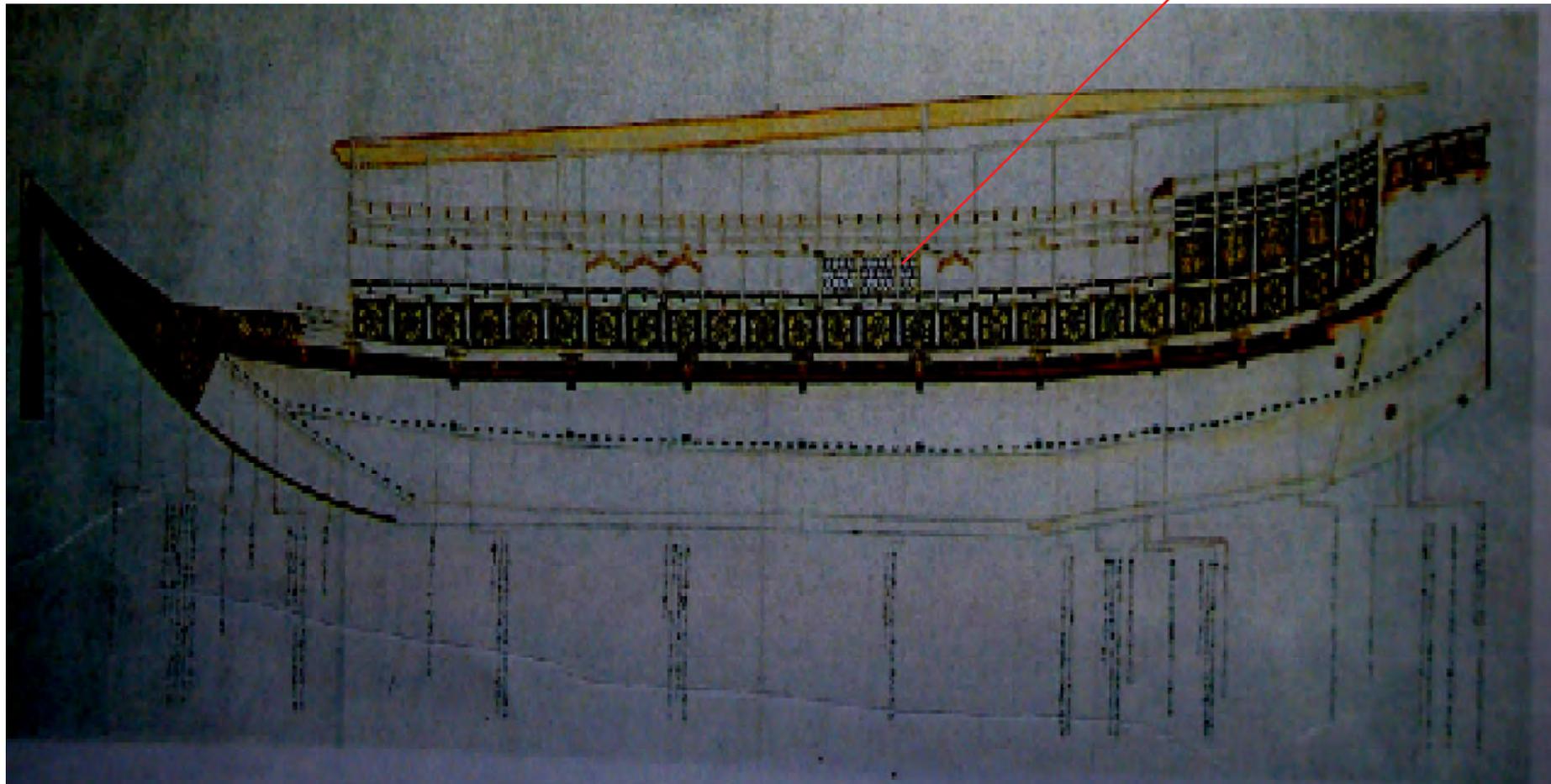
たかまつ はん ひりゅう まるしょうさいず
(4 1) 高松藩飛龍丸詳細図 (4)

おせっちん おしょうべん そとかこ きっこうくるぬ うちがわ おんしょうじ い
御雪隠・御小便の外囲いは亀甲黒塗り、内側は御障子を入れる

おんしょうべんしょない なかしきり と
御小便所内は中仕切り戸とする

おせっちん おしょうべん

御雪隠・御小便

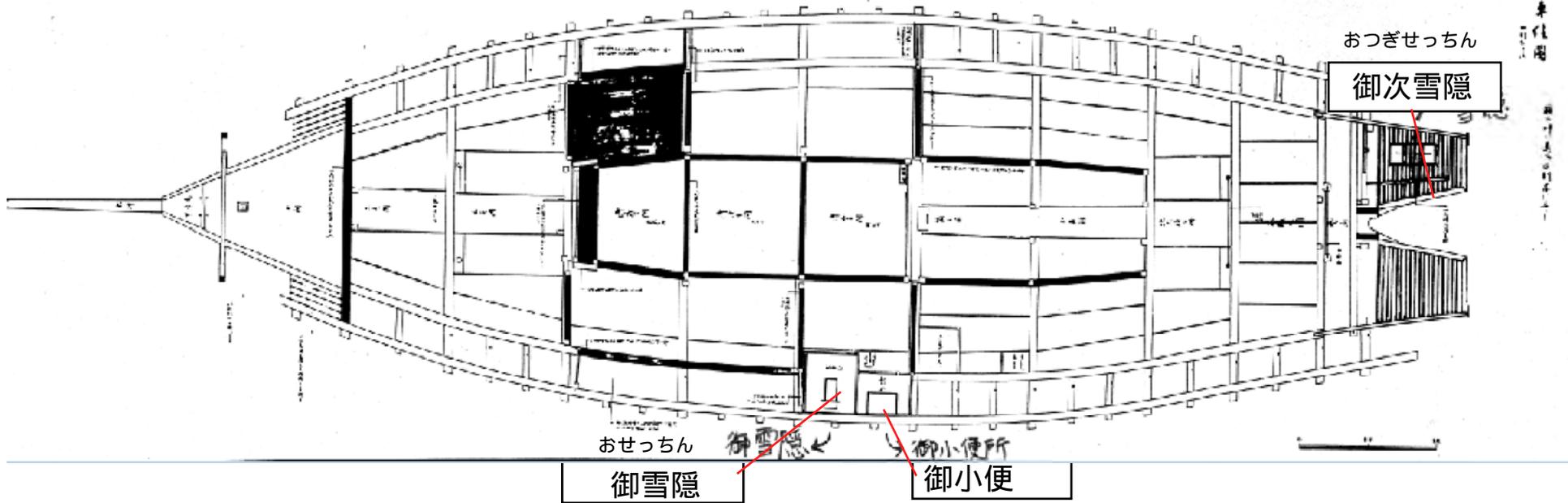


参考文献
展示資料図録 特別展「御座船」豪華絢爛 大名の船
(財)日本海事科学振興財団

参考文献：資料調査概報 香川県歴史博物館 蔵

たかまつ はん ひりゅう まる しょうさいず
 (42) 高松藩飛龍丸詳細図(5)

とも しょうさいず じず
 艫の詳細図については、次図にあります。



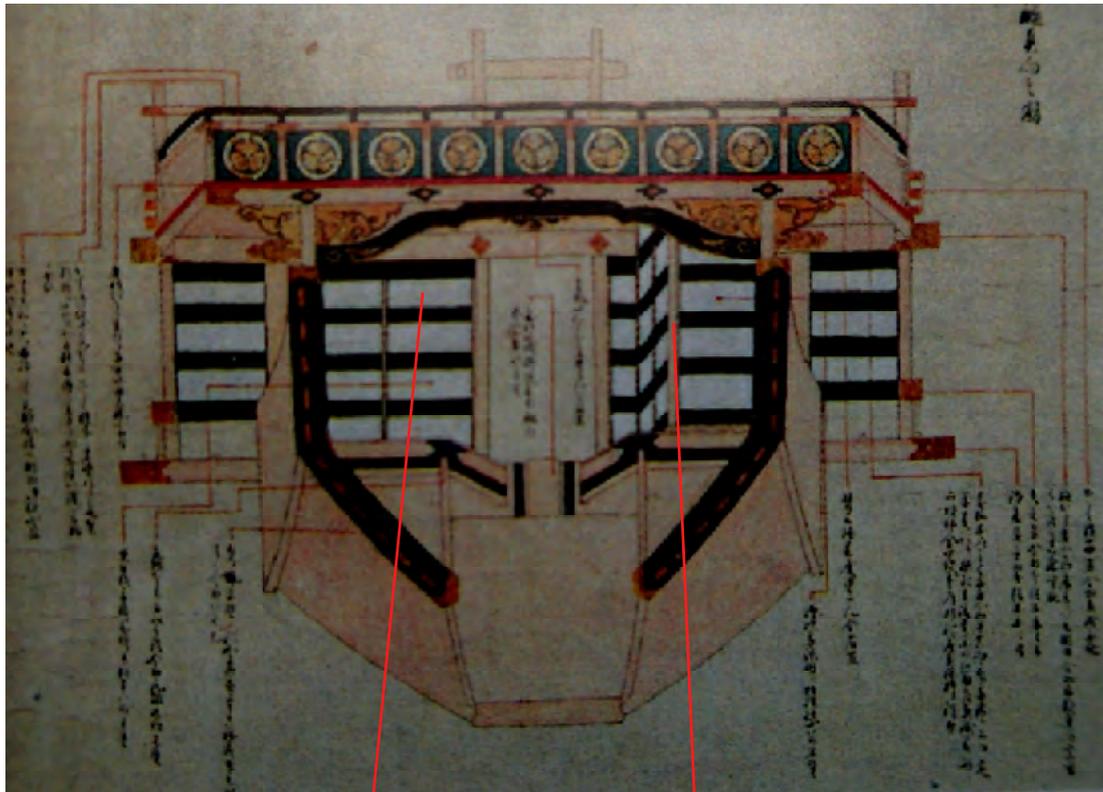
わかん せんようしゅう せんめいかずかいせんのみぶ
 和漢船用集、舟名數海船之部には用船はないが、引船、水船、臺所船、御召替舟、など
 うみ ござぶね せんだん こうぞくきょり ともぶね おお うみござぶね かわや まきだいじゅう
 あり、海御座船の船団は航続距離もながく供船も多くなる。海御座船の厠は「巻第十
 ふなどころなのぶ けすたな ゆどの せっちん どうず しめ おせっちん
 船處名之部によると「下主棚」湯殿、雪隠、このところにあり、当図に示した 御雪隠
 おんべんじよ
 御便所につきましては、(41)の 御雪隠・御小用所の詳細図に示してあります
 そくめんず おな しせつ
 側面図と同じ施設です。

たかまつはんひりゅうまる しょうさいず
(4 3) 高松藩飛龍丸詳細図 (6)

ともまむこうのず
 艫真向之図

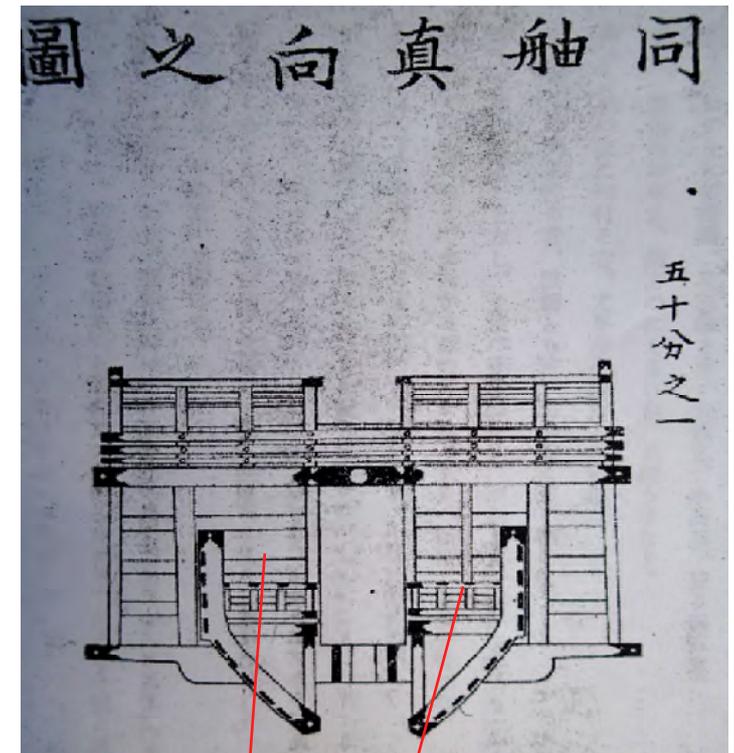
おつぎ せつちんかこ しりたなまた げしゆたな
 7. 御次雪隠囲い、11、尻棚又は下主棚ともいう。

さんこうしょが わかんせんようしゅう
 参考書画和漢船用集 p 4 8 7



おつぎしりだな
御次尻棚

おつぎせつちんかこい
御次雪隠囲い



げすだなまた しりだな
「下主棚又は尻棚ともいう」
 ゆどの せつちん
 湯殿・雪隠 この所ある